第１章　　歴史的風致形成の背景

１　本市の自然的環境

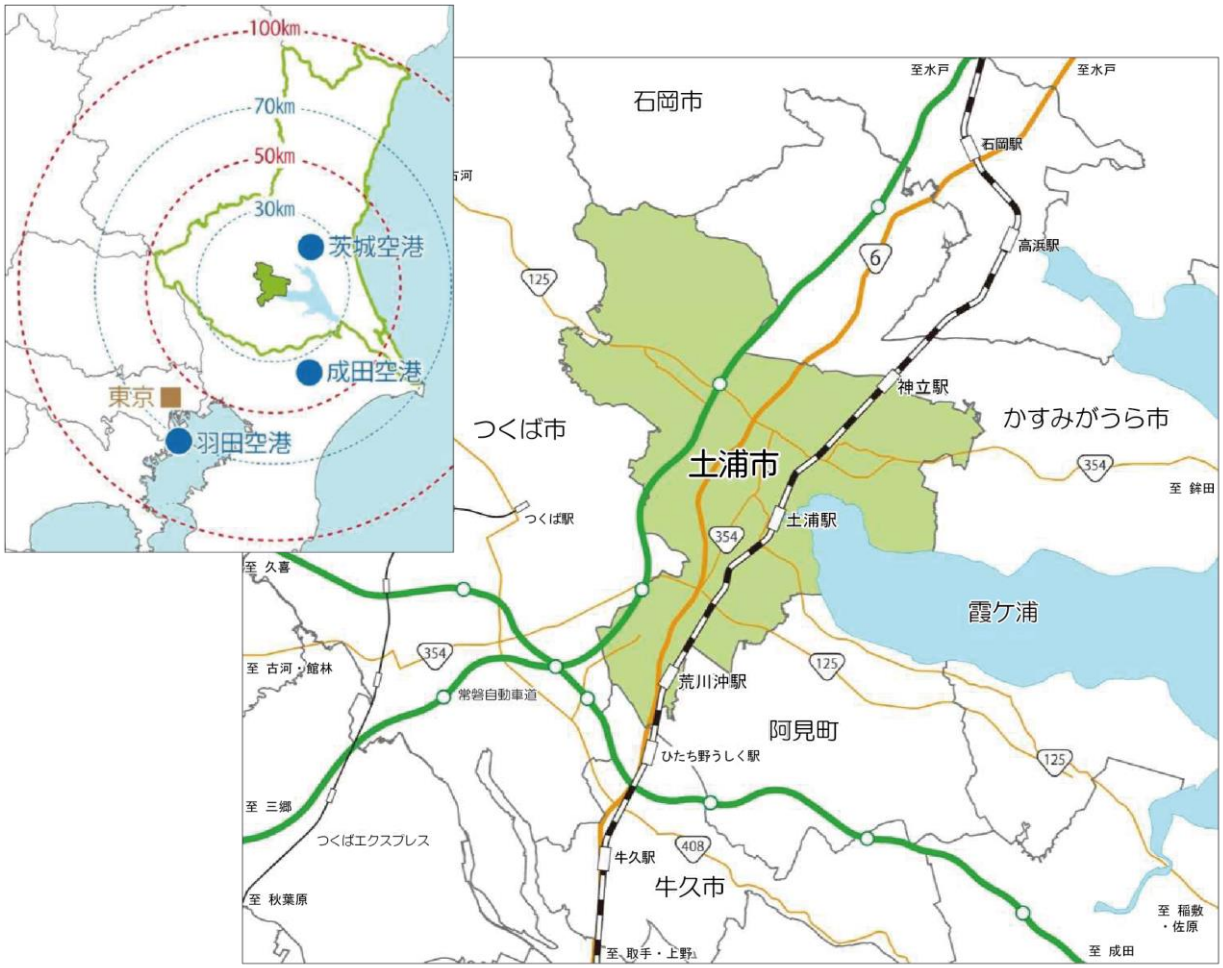
（１）位置

土浦市は、茨城県南部の都市で、日本第２位の面積を誇る霞ケ浦の西端に位置し、市の北西部には筑波山麓（つくばさんろく）が広がっている。

東京から約60km、茨城空港（いばらきくうこう）から約20km、成田国際空港（なりたこくさいくうこう）から約40kmに位置しており、石岡市、牛久市、つくば市、かすみがうら市、阿見町と隣接している。

市域は122.89㎢（うち霞ケ浦9.27㎢を含む）で、東西約14.4 km、南北約17.8kmの距離がある。

位置図

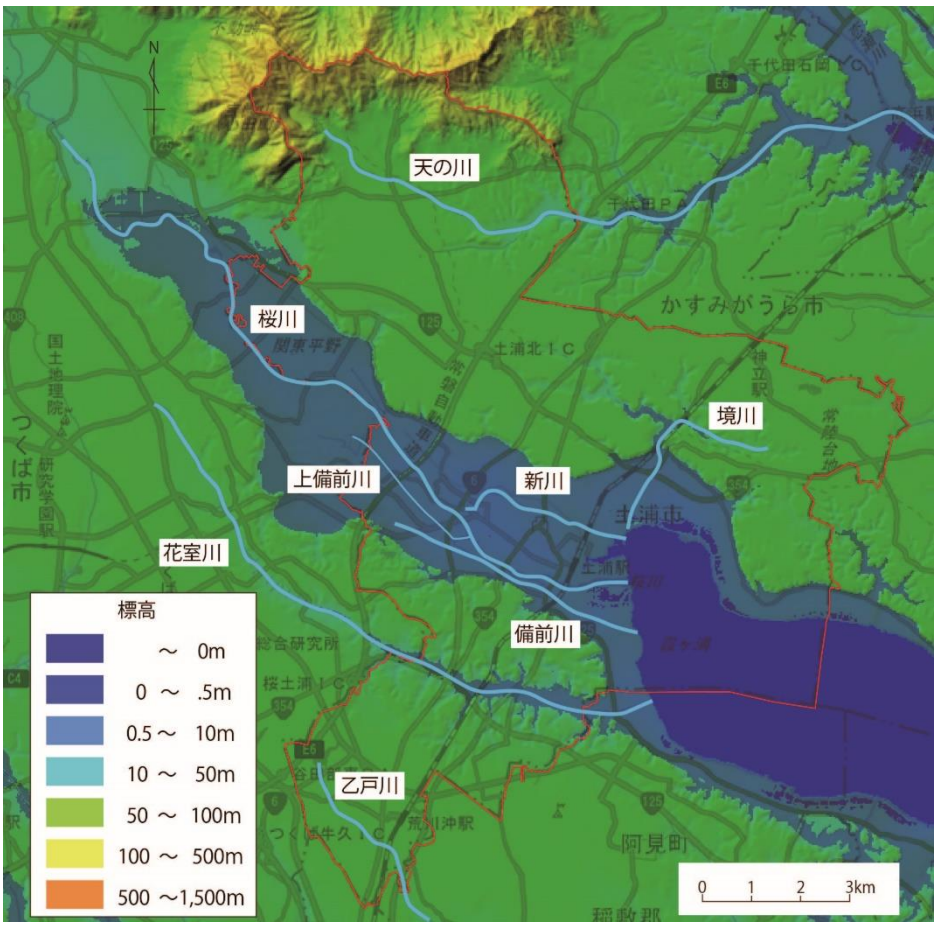


資料：第９次土浦市総合計画（令和４年（2022））

（２）地形・地質・水系

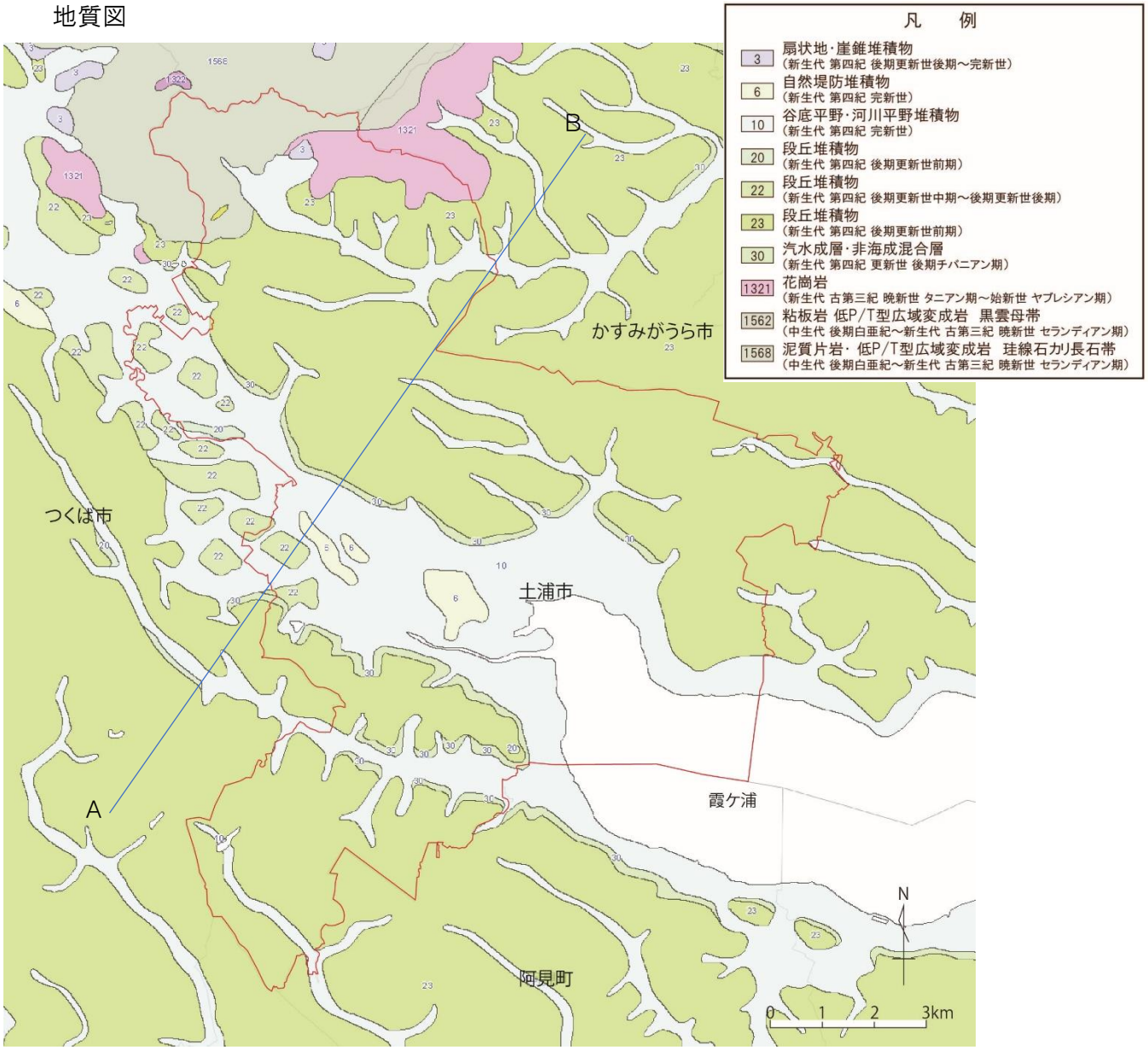
土浦市の地形を大別すると、山地、台地、低地に分けられ、北端の山地を除けば概ね平坦な地形をしている。台地は、市内中央を流れる桜川低地を境として、北に新治台地、南に筑波稲敷台地が広がっている。これらの台地は下総層群を基盤とし、その上に関東ローム層が堆積しており、台地上の標高は25m前後である。この両側の台地には低地と接するところに谷津が発達し、宍塚・矢作地区は低位段丘面となっているため、標高約４m程度の低地でありながらも関東ローム層が確認できる。また、新治台地・筑波稲敷台地ともに台地直下に小規模な河岸段丘面が存在するところがある。中央部の桜川低地は最終間氷期に古鬼怒川が流れていた名残りであり、現在の低地の幅が川の割に広いのは古鬼怒川の作用によるもので、その後古鬼怒川は西に流路を変えたため、現在の筑波山北西部を源流とする桜川が流れるようになった。市東部にある霞ケ浦は、古鬼怒川の下刻作用により削られた谷で、縄文時代の海進により内湾化したが、鹿島地域の隆起や利根川東遷等により堆積作用が進んだため、現在の平均水深約４mの浅い湖となった。なお土浦市内には桜川など８本の一級河川が流れており、霞ケ浦と併せた豊かな水源を利用し、レンコン（蓮根）栽培が盛んに行われている。

標高図



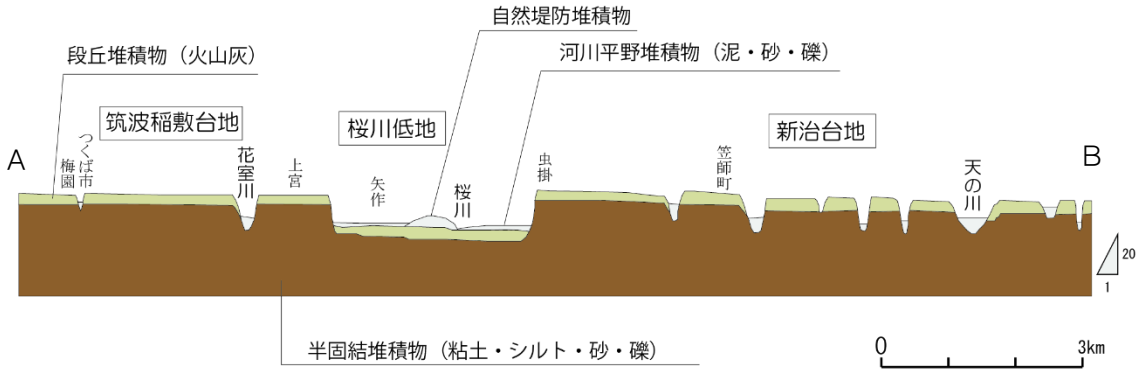
資料：国土地理院デジタル標高図

地質図



資料：シームレス地質図（地質調査総合センター）

模式断面図



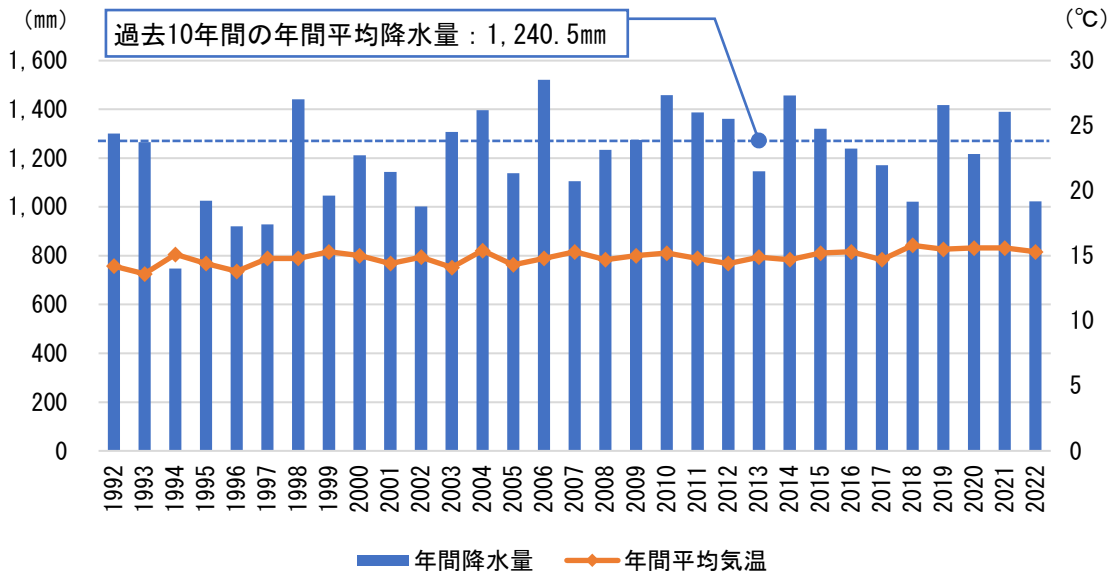
資料：土地分類基本調査図　表層地質図土浦（昭和 57 年（1982））

（３）気象

市の年間平均（過去10年間）気温は15.3℃、年間平均（過去10年間）降水量は1,240.5 mm となっており、比較的温暖な気象条件に恵まれている。

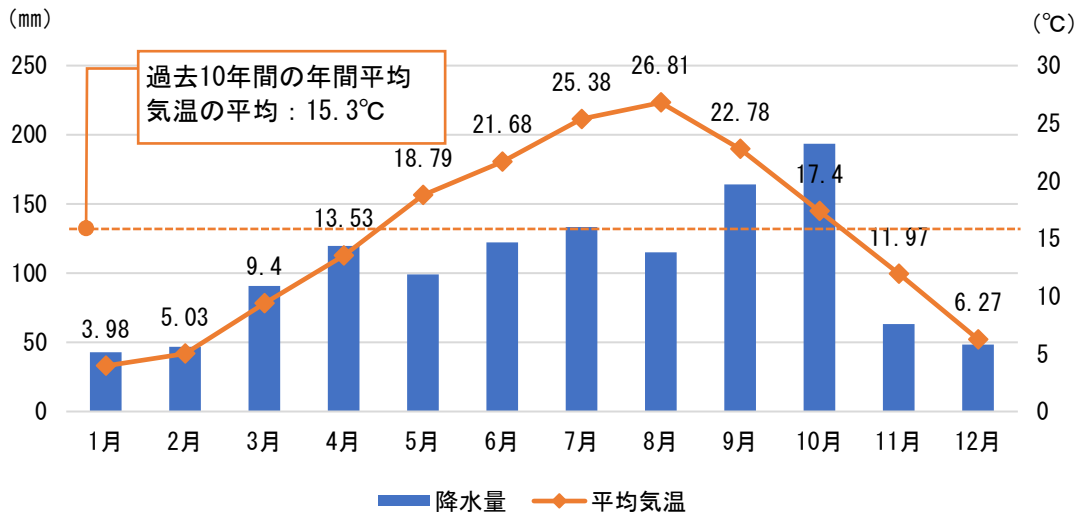
令和４年（2022）の年間平均気温は15.3℃で、年間平均（過去10年間）と同じであり、年間降水量は1,023.5 mm となっており、年間平均（過去10年間）を下回っている。

年間降水量及び年間平均気温の推移（平成４年（1992）～令和４年（2022））



資料：気象データ（国土交通省、気象庁）

月別降水量・平均気温（平成25年（2013）～令和４年（2022））



資料：気象データ（国土交通省、気象庁）

2　本市の社会的環境

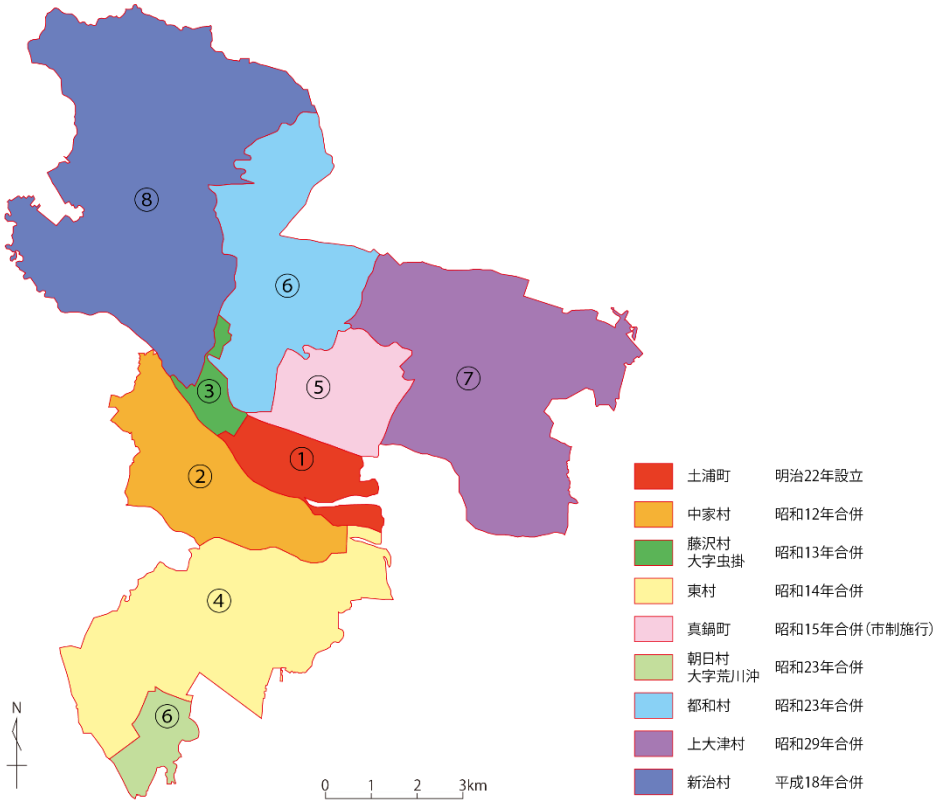
（1）市の沿革

本市は、明治22年（1889）の町村制施行に伴い、①土浦町ほかが発足した。その後、②中家村、③藤沢村大字虫掛、④東村の編入を経て、⑤昭和15年（1940）に土浦町と真鍋町が合併したことを契機に、市制施行により土浦市が発足した。

また、第二次世界大戦後から1950年代に進められた昭和の大合併の中で、昭和23年（1948）には⑥新治郡都和村 及び 稲敷郡朝日村の一部を編入。昭和29年（1954）には⑦新治郡上大津村を編入した。

平成の大合併の中で平成18年（2006）に⑧新治郡新治村を編入し現在に至る。

	合併年月日	合併事由
①	明治22年（1889）	町村制施行に伴い、土浦町ほかが誕生
②	昭和12年（1937）	中家村を編入
③	昭和13年（1938）	藤沢村大字虫掛を編入
④	昭和14年（1939）	東村を編入
⑤	昭和15年（1940）	土浦町と真鍋町が合併し土浦市発足
⑥	昭和23年（1948）	新治郡都和村 及び 稲敷郡朝日村の一部を編入
⑦	昭和29年（1954）	新治郡上大津村を編入
⑧	平成18年（2006）	新治郡新治村を編入



資料：図説土浦の歴史（平成３年（1991））

年代別沿革表

<table>
<tr><th></th><th>①
明治22年
（1889）</th><th>②
昭和12年
（1937）</th><th>③
昭和13年
（1938）</th><th>④
昭和14年
（1939）</th><th>⑤
昭和15年
（1940）</th><th>⑥
昭和23年
（1948）</th><th>⑦
昭和29年
（1954）</th><th>－
昭和30年
（1955）</th><th>⑧
平成18年
（2006）</th></tr>
<tr><td>沖宿村、田村、手野村、
白鳥村、菅谷村、神立村</td><td>上大津村</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td rowspan="8">→</td><td rowspan="8">→</td><td rowspan="8">土浦市</td></tr>
<tr><td>荒川沖村、沖新田</td><td>朝日村</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td rowspan="7">→</td></tr>
<tr><td>常名村、中貫村、小山崎村、
今泉村</td><td>都和村</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td></tr>
<tr><td>木田余村、真鍋村、殿里村</td><td>真鍋町</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td rowspan="6">土浦市
（市制施行）</td></tr>
<tr><td>大岩田村、小岩田村、永国村、
中村西根、中村、右籾村、
摩利山村、烏山村、乙戸村</td><td>東村</td><td>→</td><td>→</td><td rowspan="4">土浦町</td></tr>
<tr><td>土浦町</td><td>土浦町</td><td rowspan="2">土浦町</td><td rowspan="2">土浦町</td></tr>
<tr><td>佐野子村、飯田村、矢作村、
宍塚村、粕毛村、上高津村、
小松村</td><td>中家村</td></tr>
<tr><td rowspan="2">虫掛村、藤沢村、大畑村、
上坂田村、下坂田村</td><td rowspan="2">藤沢村</td><td rowspan="2">→</td><td>（虫掛）</td><td rowspan="2">→</td><td rowspan="2">→</td><td rowspan="2">→</td><td rowspan="2">→</td><td rowspan="2">→</td><td rowspan="4">新治村</td></tr>
<tr><td>→</td></tr>
<tr><td>永井村、本郷村、大志戸村、
小野村、東城寺村、小高村</td><td>山ノ荘村</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td></tr>
<tr><td>沢辺村、田宮村、田土部村、
高岡村、藤沢新田</td><td>斗利出村</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td><td>→</td></tr>
</table>

令和２年（2020）に市制施行80周年の節目を迎え、同年11月３日に土浦市民会館において記念式典が開催された。

市制施行 80 周年記念統一デザイン（令和３年（2021））

（２）土地利用

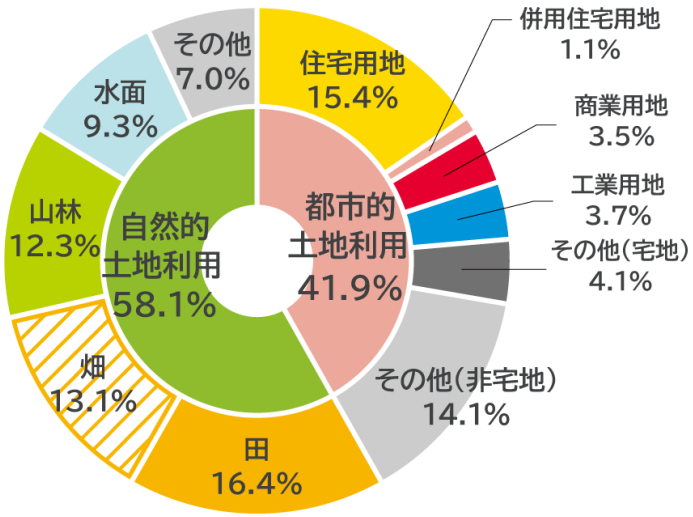
市域122.89㎢のうち、住宅用地や工業用地等の都市的土地利用が51.43㎢（41.9%）、このうち住宅用地は20.37㎢（16.5%）を占める。

また、農地や山林等の自然的土地利用が71.46㎢（58.1%）、このうち、農地は36.27㎢（29.5%）を占める。

JR常磐線の３駅（土浦駅、荒川沖駅（あらかわおき）、神立駅（かんだつ））を中心とした市街地に住宅用地、商業用地が広がり、神立駅周辺や土浦北インターチェンジ周辺などの市北部に工業用地が集積している。

この他、市西部の桜川沿いや東部の霞ケ浦沿岸に優良農地が広く分布し、市北西部は、筑波山へと連なる山林地が広がる。

土地利用状況

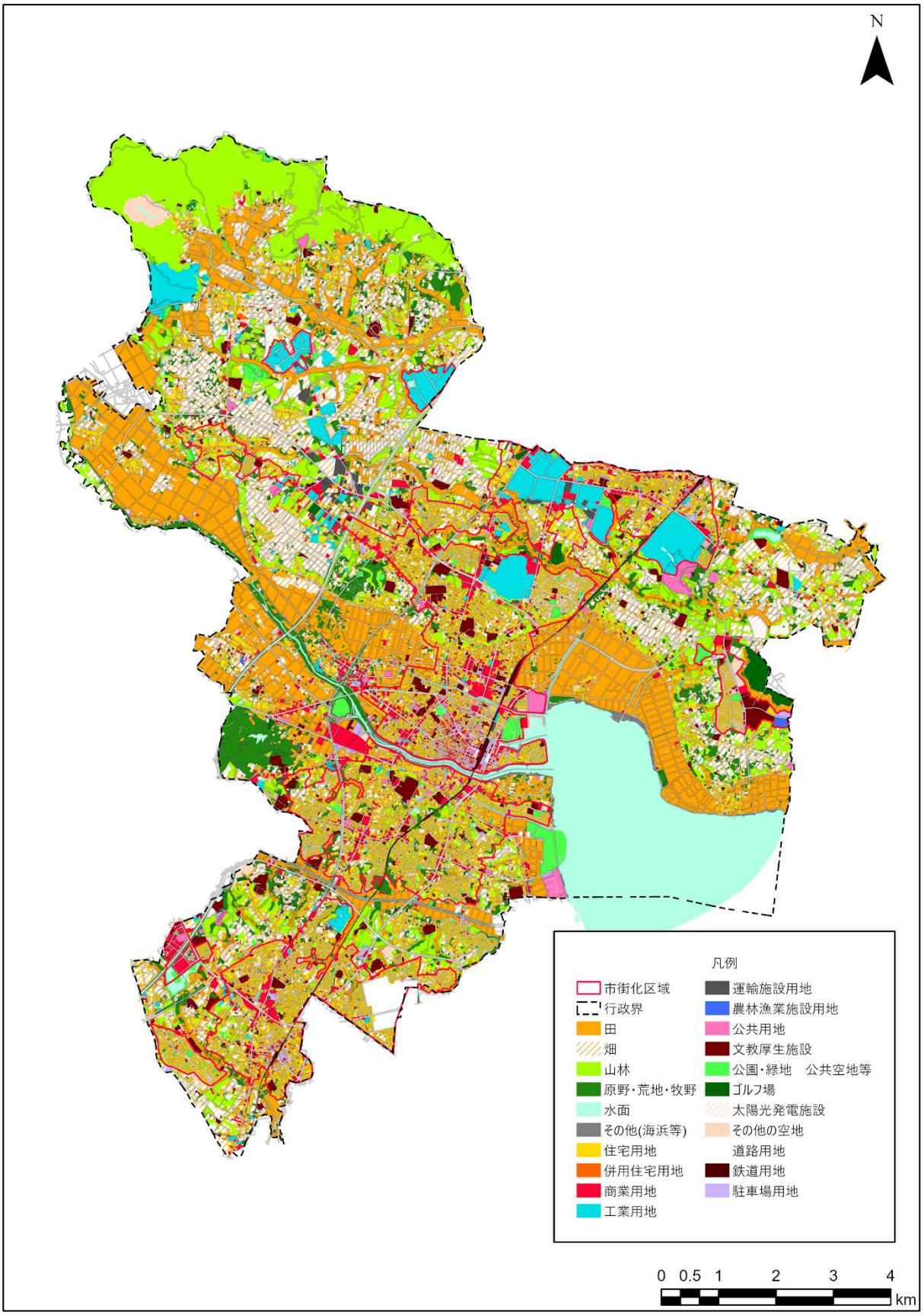


土地利用状況

自然的 土地利用	面積(㎢)	構成比	都市的 土地利用	面積(㎢)	構成比(%)
田	20.11	16.4%	住宅用地	19.06	15.4%
畑	16.16	13.1%	併用住宅用地	1.31	1.1%
山林	15.07	12.3%	商業用地	4.24	3.5%
水面	11.38	9.3%	工業用地	4.50	3.7%
その他	8.74	7.0%	その他宅地	5.01	4.1%
－	－	－	その他非宅地	17.31	14.1%
合計	71.46	58.1%	合計	51.43	41.9%

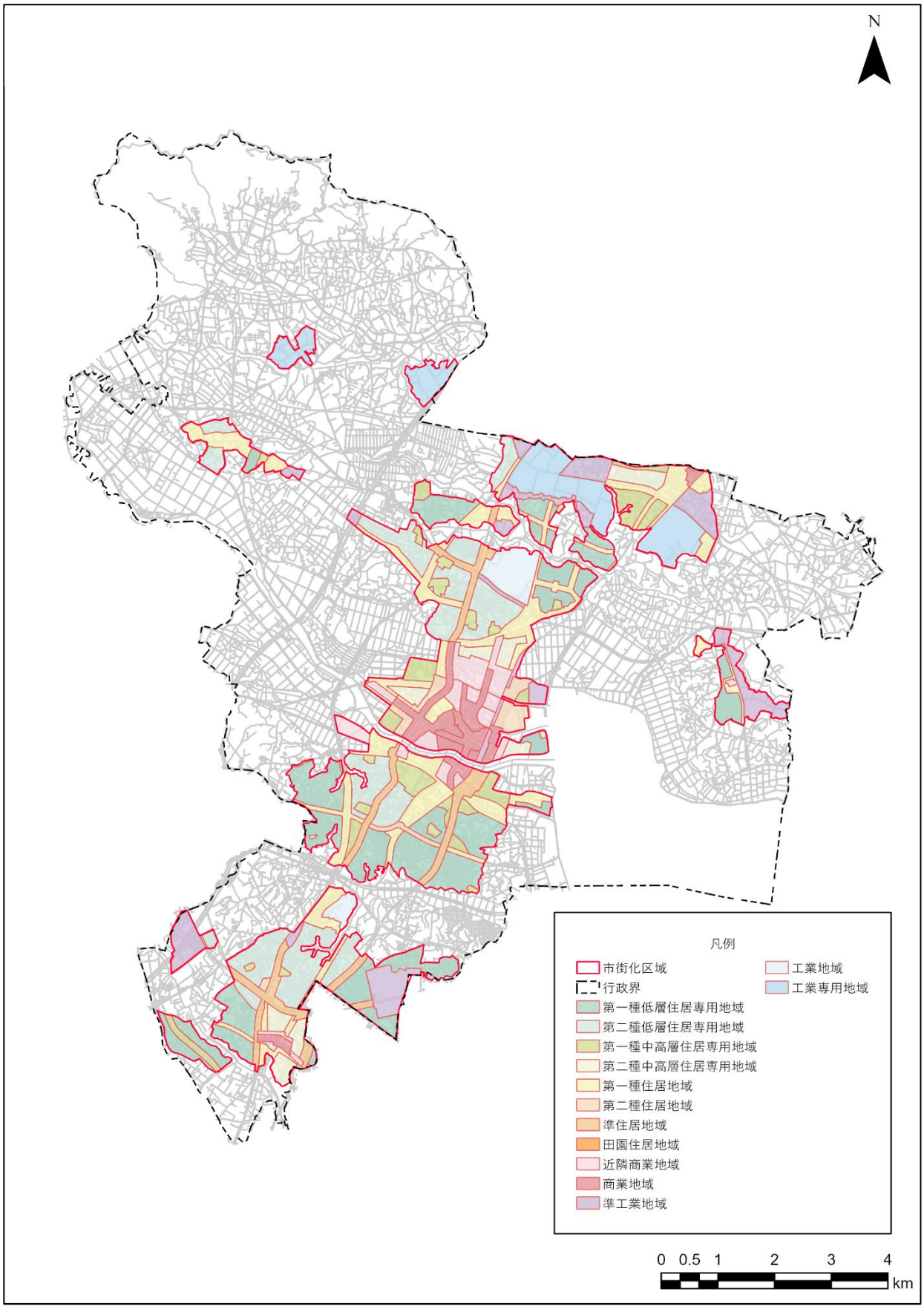
資料：都市計画基礎調査（令和３年（2021））

土地利用状況図



資料：都市計画基礎調査（令和３年（2021））

用途地域図



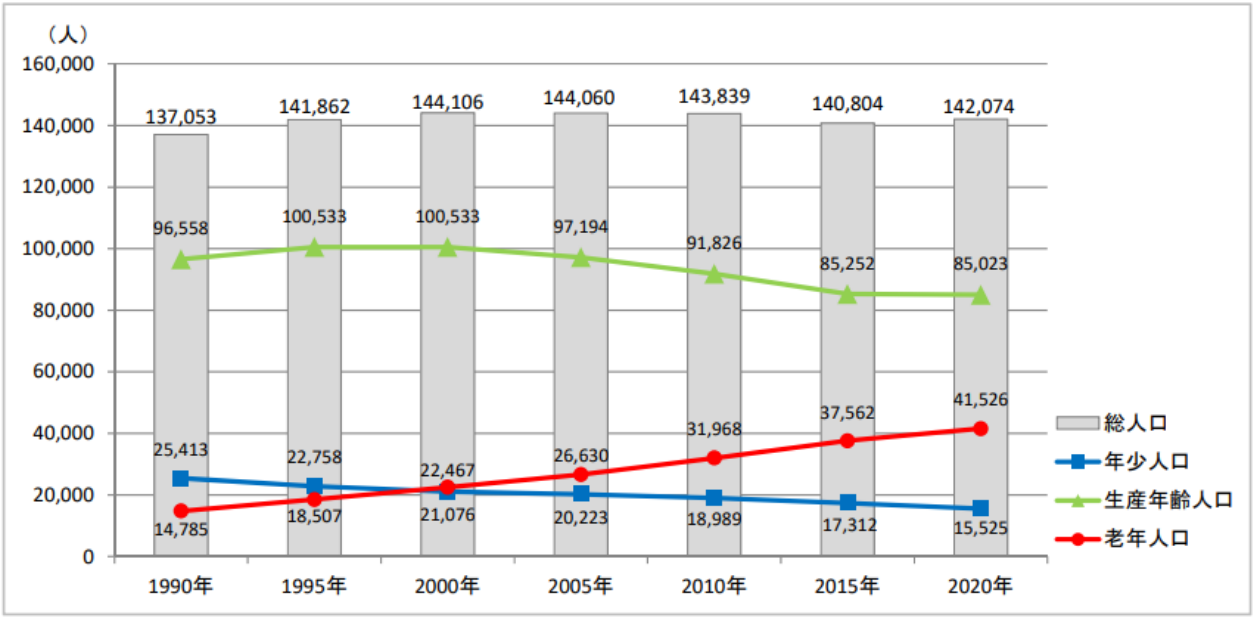
資料：都市計画基礎調査（令和３年（2021））

（３）人口動態

本市の人口は、国勢調査では平成12年（2000）をピークに緩やかに減少傾向にあったが、令和２年（2020）には、増加に転じており、現在14万人程度で推移している。

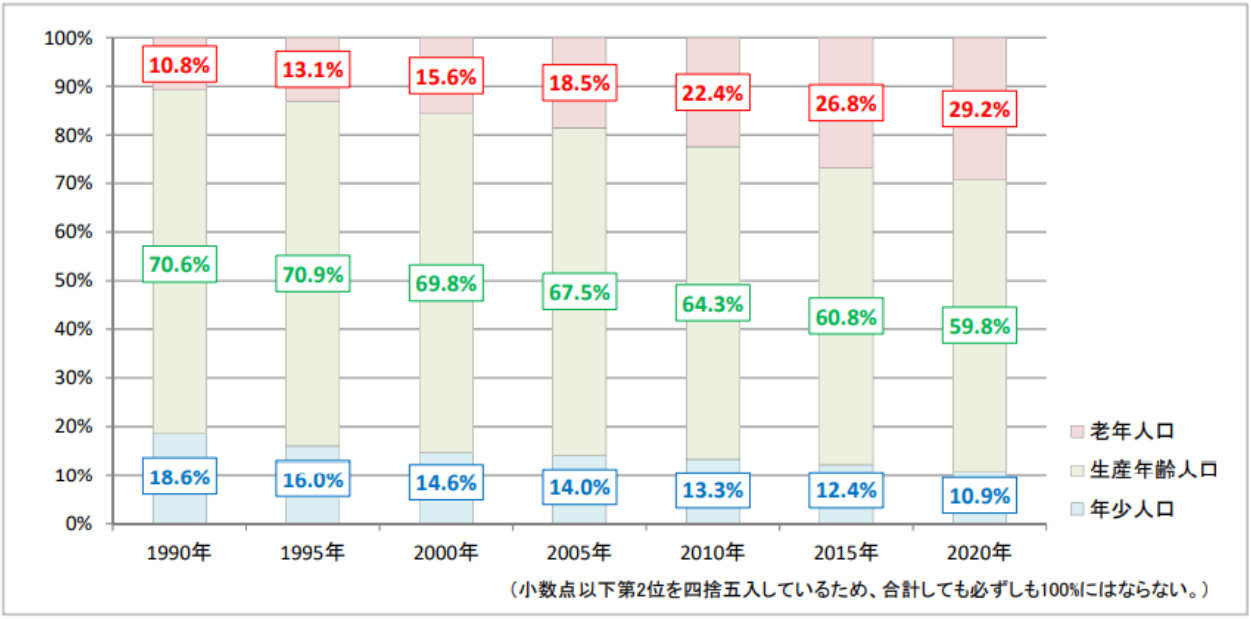
年齢３階級別人口では、年少人口及び生産年齢人口共に減少がみられる一方で、老年人口は増加傾向にあり、平成12年（2000）には年少人口を上回り、平成２年（1990）から30年で約３倍となっている。

人口増減



資料：総務省国勢調査

年齢３階級別人口割合の推移

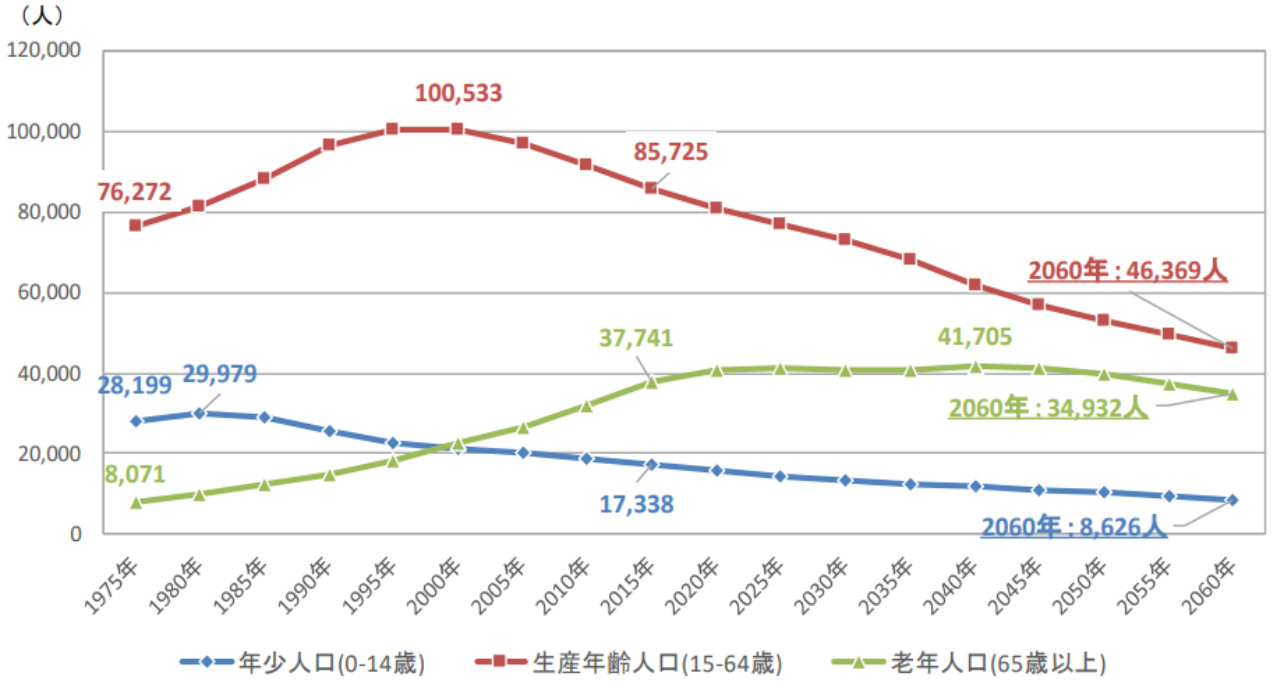


資料：総務省国勢調査

■ 将来人口推計

平成30年（2018）の国立社会保障・人口問題研究所の最新の推計では、本市の人口は、令和42年（2060）に89,927人になる見込みとなっている。

年齢（３区分）別の将来人口推計



年/区分	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年
総人口	140,804人	137,135人	132,537人	127,154人	121,216人	114,978人	108,757人	102,640人	96,389人	89,927人
年少人口	17,338人	15,770人	14,348人	13,284人	12,366人	11,698人	11,011人	10,225人	9,394人	8,626人
人口比率	12.3%	11.5%	10.8%	10.4%	10.2%	10.2%	10.1%	10.0%	9.7%	9.6%
生産年齢人口	85,725人	80,748人	77,169人	73,051人	67,923人	61,575人	56,688人	52,853人	49,622人	46,369人
人口比率	60.9%	58.9%	58.2%	57.5%	56.0%	53.6%	52.1%	51.5%	51.5%	51.6%
老年人口	37,741人	40,618人	41,019人	40,819人	40,927人	41,705人	41,057人	39,563人	37,372人	34,932人
人口比率	26.8%	29.6%	30.9%	32.1%	33.8%	36.3%	37.8%	38.5%	38.8%	38.8%

資料：第２期土浦市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン（令和２年（2020））

※将来人口推計は、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」（平成30年（2018）推計）を基に整理したものであり、前項の国勢調査を基にした人口増減の指標と一部相違がある。

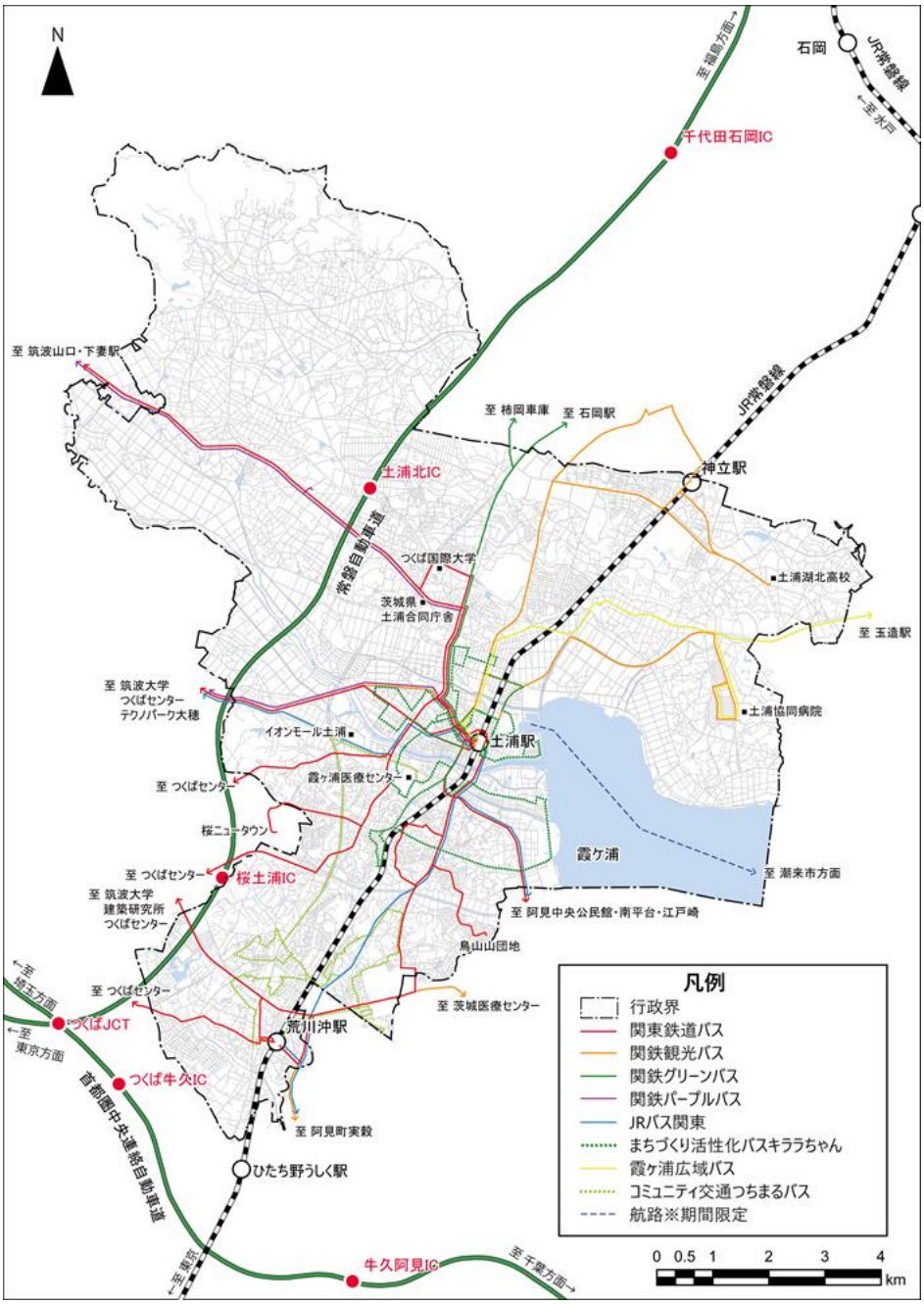
（４）交通ネットワーク

本市の主要な道路については、常磐自動車道及び国道６号が南北に、国道125号・354号が東西に通るとともに、市の南北に、常磐自動車道桜土浦（さくらつちうら）インターチェンジ及び土浦北インターチェンジが整備されている。

公共交通機関については、JR常磐線のほか、路線バスが、JR３駅（土浦駅、荒川沖駅、神立駅）を中心に、民間５事業者により運行されている。

また、霞ケ浦では、遊覧船が民間２事業者により運航されており、内１事業者が行楽シーズン等期間を限定して潮来（いたこ）市方面へ定期船を就航している。

公共交通網図



資料：つちナビ！（令和４年（2022）10 月時点）

（５）産業

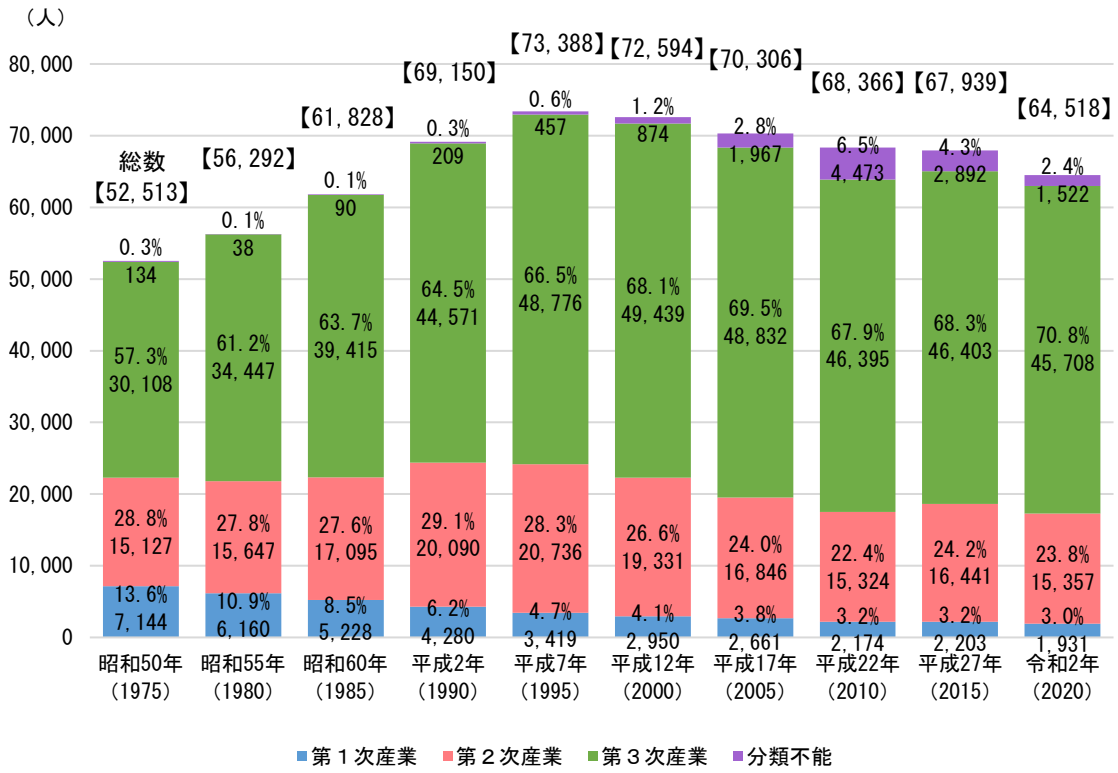
本市の産業（３区分）別の就業者総数は、平成７年（1995）をピークに緩やかに減少し、直近では、64,518人となっている。

産業別では、第３次産業への就業者数が最も多く、ついで第２次産業、第１次産業となり、時系列では、第１次産業への就業者数は一貫して減少傾向にあり、昭和50年（1975）から約７割減少している。

第２次産業は平成２年（1990）から平成22年（2010）まで減少傾向にあったが、平成27年（2015）に若干の増加がみられる。また、第３次産業は平成17年（2005）から減少傾向にあったが、平成27年（2015）から増加している。

産業別の人口割合では、昭和50年（1975）には約14%を占めていた第１次産業への就業者は直近では3.0%まで減少する一方で、昭和50年（1975）には約57%であった第３次産業への就業者は直近では70.8%を占めており、第３次産業への集中が顕著になっている。

産業（３区分）別就業人口の割合の推移



資料：総務省国勢調査

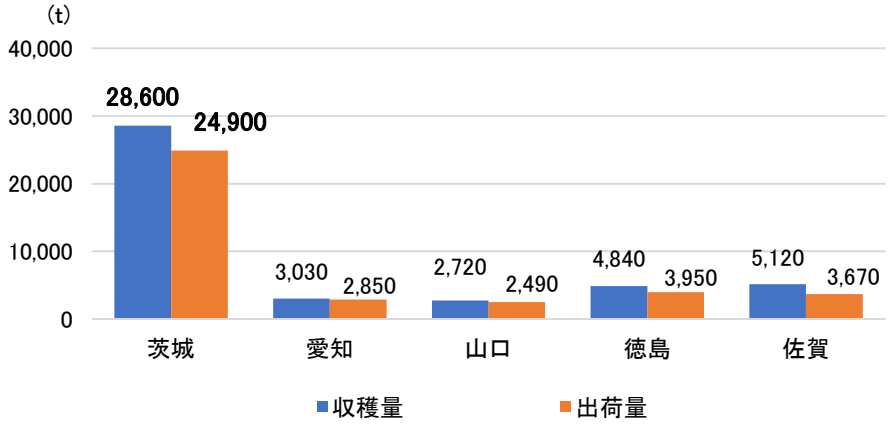
① 農水産業

本市の農業は、温暖な気候と筑波山麓の東端に位置する里山から霞ケ浦沿岸まで続く肥沃（ひよく）な土壌と豊富な水資源に恵まれた気候風土により、霞ケ浦湖岸の低湿地帯の特性を活かした全国生産量第１位のレンコンや、市北西部でのグラジオラスやアルストロメリアを中心とした花卉（かき）の栽培が盛んで、全国的に有数の産地となっている。

また、桜川沿岸の基盤整備が実施された圃場（ほじょう）においては水稲、畑作では梨、柿等の果樹やそばが多く作付けされており、特に常陸秋そばについては茨城県内でも盛んに生産されている地域のひとつとなっている。

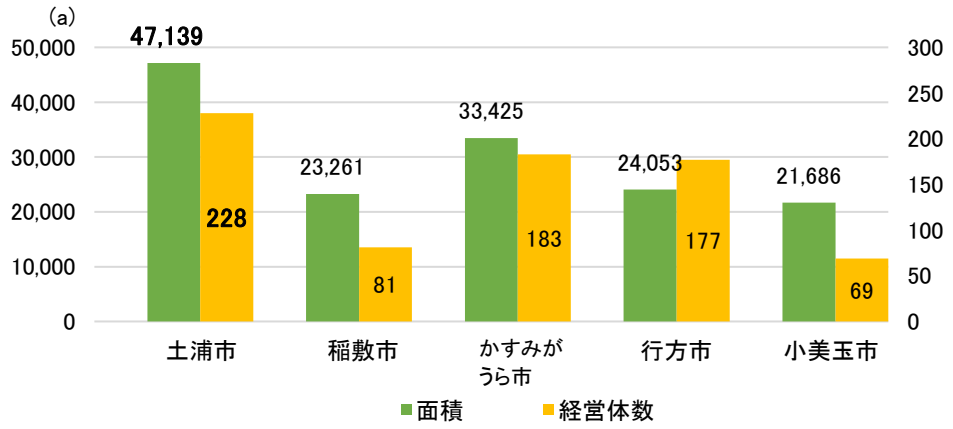
水産業では、霞ケ浦を特徴づけるワカサギ、シラウオ、エビ・ハゼ類などの水産物があり、煮干（にぼし）・佃煮（つくだに）など加工品の材料となっている。

レンコンの収穫量・出荷量（全国上位５県）



資料：農林水産省作物統計調査（令和２年（2020））

レンコンの生産面積・経営体数（茨城県ベスト５）



資料：農林水産省2020年農林業センサス（令和２年（2020））

霞ケ浦の魚種別漁獲量

（単位：t）

魚　　種	H27	H28	H29	H30	R1	R2
ワ　カ　サ　ギ	247	159	83	92	118	72
シ　ラ　ウ　オ	143	137	187	160	154	179
コ　　イ	1	0	－	0	－	0
フ　　ナ	5	0	0	0	0	0
ウ　ナ　ギ	－	3	5	2	1	0
ハゼ類（ゴロ）	4	8	11	6	2	1
エ　ビ　類	238	233	214	244	133	87

資料：農林水産省漁業・養殖業生産統計

レンコン収穫の様子

壮観な蓮田（はすだ）の景観

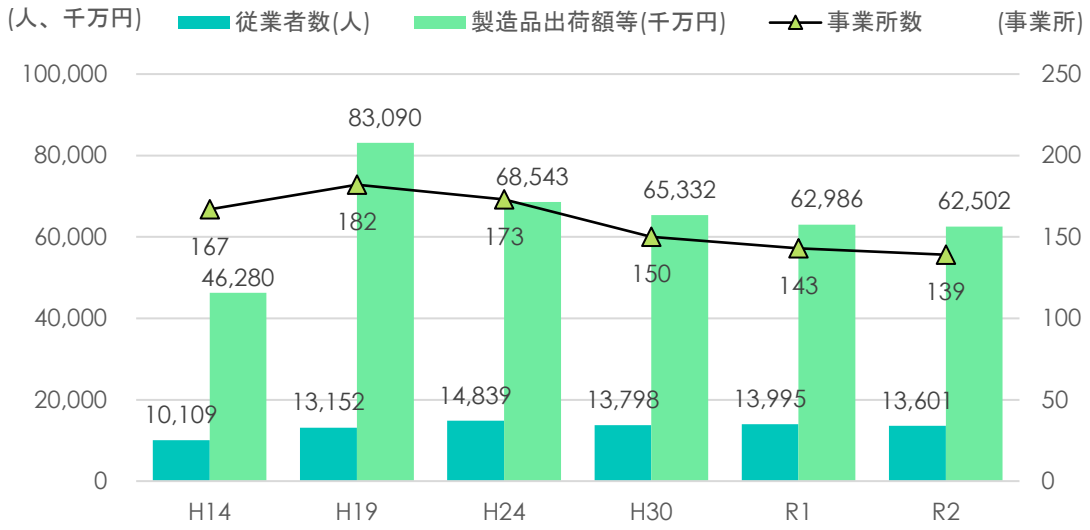
グラジオラス

佃煮

② 工業

本市の工業は、市北部の土浦・千代田（ちよだ）工業団地、東筑波新治工業団地、テクノパーク土浦北工業団地などに大規模工場が立地するほか、中小工場が数多く立地している。事業所数は平成19年（2007）の182事業所をピークに減少し、令和２年（2020）では139事業所となっている。製造品出荷額等は、平成21年（2009）にリーマンショックにより大きく減少し、以降、緩やかにではあるが減少が続いている。令和２年（2020）では6,250億円となっている。

従業者数、製品出荷額等、事業所数の推移



資料：経済産業省工業統計

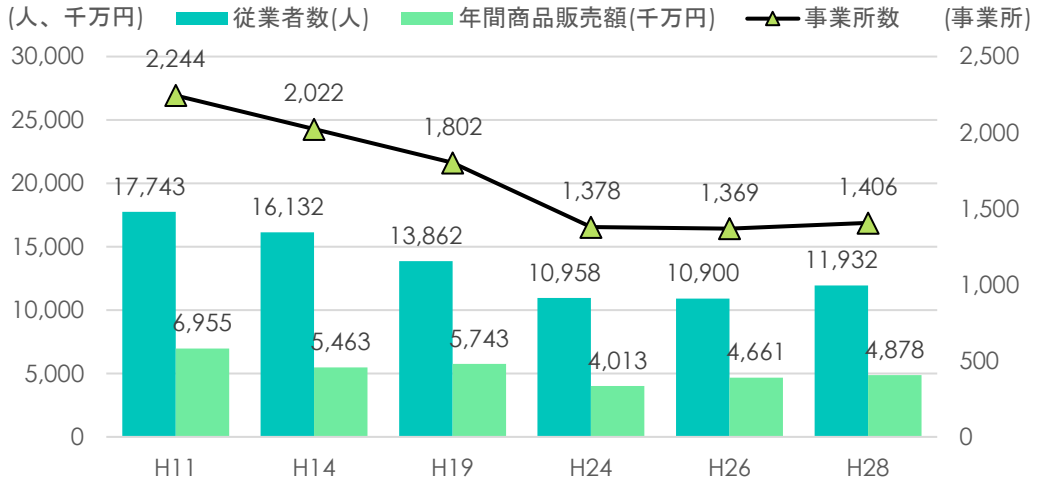
③ 商業

本市の商業は、江戸時代の城下町に始まり、明治、大正、昭和と土浦駅を中心として県内有数の集積を誇っていたが、近年はモータリゼーションを背景に市街地周辺部や、近郊に駐車場を備えた大規模店舗が進出したことより、中心市街地の空洞化が進んでいる。

このような背景を受け、市では平成26年（2014）に「土浦市中心市街地活性化基本計画」を策定し、空き店舗対策事業などを推進している。

事業所数は平成11年（1999）には2,244事業所であったが、平成24年（2012）には1,378事業所と大きく減少し、平成28年（2016）では1,406事業所となっている。年間商品販売額は、増減を繰り返しており、平成28年（2016）では487億円となっている。

従業者数、年間商品販売額、事業所数の推移



資料：経済産業省商業統計

（６）観光

本市の一部は「水郷筑波国定公園」に指定され、東部の霞ケ浦や北西部の筑波山麓などの雄大な自然が広がるほか、土浦城址を中心とした城下町としての歴史的雰囲気を残す中心市街地、里山の風景が広がる新治地区など、豊かな観光資源に恵まれている。

また、日本有数の規模を誇る土浦全国花火競技大会やかすみがうらマラソン兼国際ブラインドマラソンなどのイベントも盛んに行われている。

しかし、令和元年（2019）度からの新型コロナウイルス感染症の流行により、イベントやまつりの規模縮小や中止が相次ぎ、本市を訪れる観光客数は大きく落ち込んだ。

最近は、独りでできるスポーツとして自転車や登山で本市を訪れる人が増えている。本市を通る自転車道「つくば霞ヶ浦りんりんロード」が、令和元年（2019）にナショナルサイクルルートの指定を受け、拠点となる土浦駅前や平成30年（2018）に整備された「りんりんポート土浦」周辺では、休日になると多くのサイクリストで賑わう。

また、登山のため宝篋山と小町山を訪れる客が増え、登山口である小町の里では、地元産の蕎麦が好評を博している。

土浦市を訪れる外国人訪問客数も、近年増加傾向にあり、令和２年度（2020）から令和３年度（2021）にかけて大きく落ち込んだものの、令和４年度（2022）には増加に転じた。

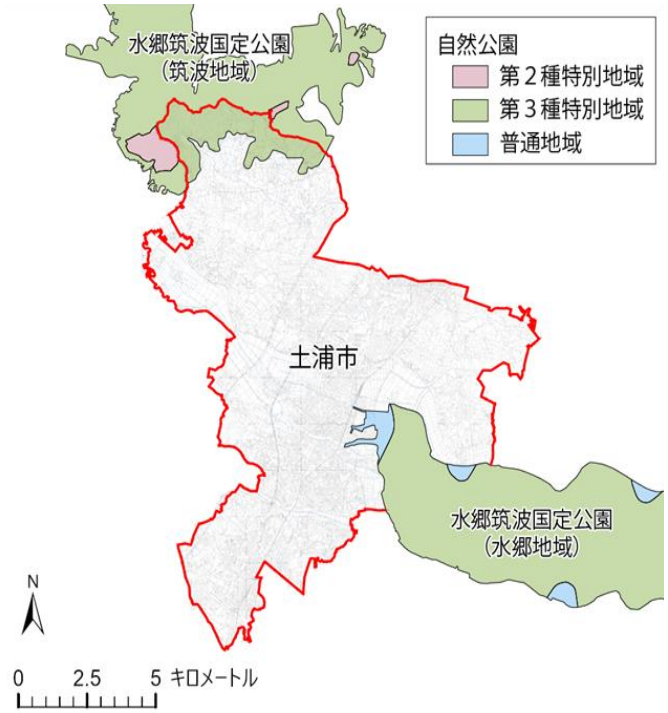
土浦全国花火競技大会

かすみがうらマラソン
兼国際ブラインドマラソン

つくば霞ヶ浦りんりんロード

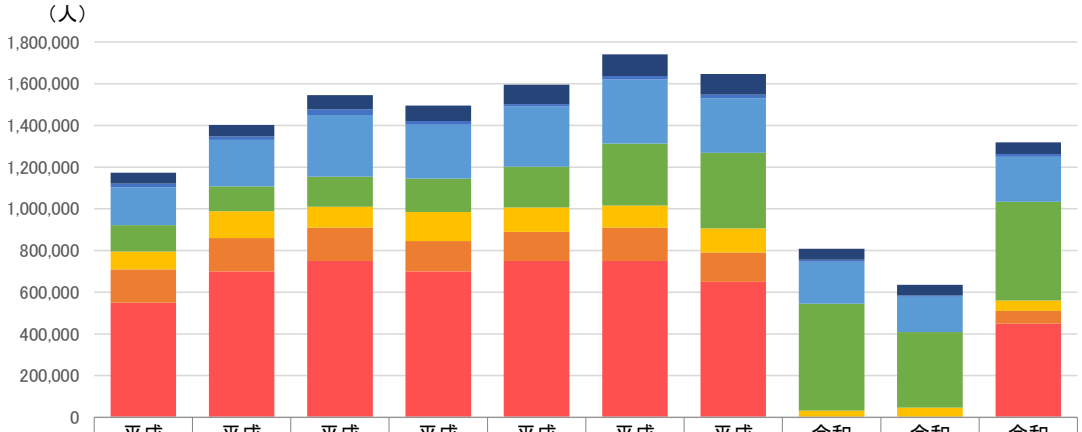
資料：茨城県ホームページ

水郷筑波国定公園位置図



資料：茨城県自然公園等配置図

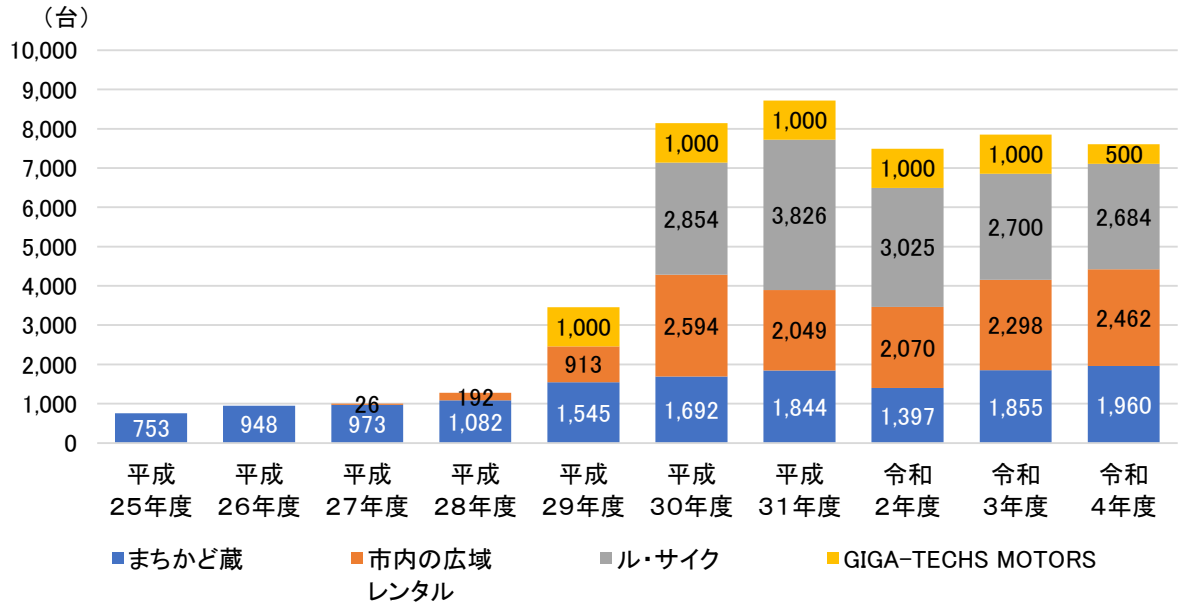
観光入込客数の推移



	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全体	1,173,435	1,401,514	1,545,570	1,494,730	1,595,389	1,740,954	1,646,053	808,102	636,063	1,318,660
亀城公園	53,194	54,642	68,883	74,011	92,908	103,503	98,977	52,638	51,951	56,244
土浦港	17,072	16,286	27,074	17,469	12,582	17,057	17,898	8,944	5,985	12,461
霞ヶ浦総合公園	181,641	222,549	294,986	258,554	287,833	307,931	260,670	201,007	169,096	216,114
小町の里	126,528	120,077	144,627	159,696	196,066	296,463	362,508	513,376	362,876	473,022
桜まつり	85,000	127,960	100,000	140,000	116,000	106,000	116,000	32,137	46,155	50,819
キララまつり	160,000	160,000	160,000	145,000	140,000	160,000	140,000	0	0	60,000
全国花火競技大会	550,000	700,000	750,000	700,000	750,000	750,000	650,000	0	0	450,000

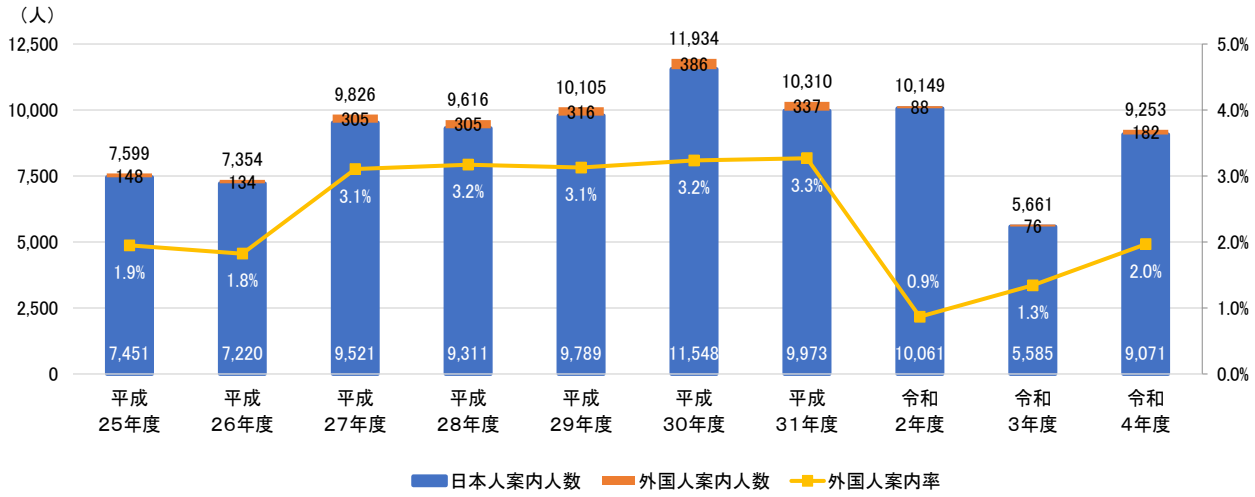
資料：土浦市観光客動態調査

土浦市内におけるレンタサイクル貸出数



資料：土浦市調査資料

土浦市観光案内所における外国人観光客案内人数



資料：土浦市調査資料

３　本市の歴史的環境

（１）歴史

① 原始（旧石器時代～古墳時代）

【旧石器時代・ナウマンゾウを追った狩猟生活】

日本列島には今から約４万年前から人類が居住し始めた。この頃の地球環境は氷期に当たり、海面は今よりも120mほど低くなっており、霞ケ浦はまだ無く、谷が深く削られて河が流れていた。

霞ケ浦や桜川・花室川（はなむろがわ）の流域では、ナウマンゾウの牙や臼歯（きゅうし）の化石が数多く見つかっており、本市域にナウマンゾウが生息していたことを示す証拠となっている。

ナウマンゾウの歯の化石

現在、旧石器時代の遺跡は市内に50か所ほど確認されており、最も古いのは山川古墳群（やまかわこふんぐん）や寺畑遺跡（てらはたいせき）で、寺畑遺跡では台形様石器（だいけいようせっき）や、炉跡（ろあと）を伴う石器ブロックが出土している。

【縄文時代・内海の幸と貝塚文化】

日本列島で土器の使用が始まる縄文時代草創期は氷期で、旧石器時代同様の遊動（ゆうどう）生活が行われていたと考えられている。この頃の市内遺跡からは尖頭器（せんとうき）などの石器がみつかっているが、土器は発見されていない。氷期が終わると、ヤンガードリアス期という「寒（かん）の戻り」を挟んで、一気に気候が温暖化した。

上高津貝塚

縄文時代前期頃、海水面は今からプラス２～３ｍに達し、霞ケ浦から利根川（とねがわ）下流域は広く内湾となった。本市域では、早期後葉（こうよう）（約8,000～7,500年前）から貝塚の形成が見られ、前期には赤（あか）弥堂（みどう）遺跡などで貝塚を伴う集落遺跡が形成されている。

後期には、桜川沿岸に貝塚を伴う拠点的な集落が形成され、その一つが上高津貝塚（かみたかつかいづか）である。貝塚は汽水産のヤマトシジミなどで構成され、貝塚周辺の低地が当時海だった霞ケ浦に流れ込む桜川の河口であったことを示している。また、台地上で出土した製塩土器（せいえんどき）や大型炉は、縄文時代の生業と環境を知るうえで貴重な資料で、昭和52年（1977）に国の史跡指定を受けた。その後、公有化と整備が進められ、平成７年（1995）に遺跡公園

と考古資料館からなる「上高津貝塚ふるさと歴史の広場」が開館し、入場者は年間約３万人に上る。

【弥生時代・石器や土器などに見る各地との交流】

本市域の弥生遺跡は、天の川流域や桜川流域などの谷津に面した台地に立地しており、ほとんどが弥生時代後期の小規模な集落である。現状で確認される最も古い弥生時代中期末の遺跡としては、東山団地遺跡（板谷）があり、大陸系の石器である磨製石鏃が出土している。

原田遺跡群出土土器

弥生時代後期の集落を見ると、繊維に撚りをかけて糸を紡ぐ紡錘車の出土が多く、カラムシ（イラクサ科の多年生植物）を材料とした布生産が盛んであったと推測される。

また、天の川流域の原田遺跡群（紫ケ丘・今泉町・粟野町）は長期間継続し、竪穴建物の合計が180軒を超える県内でも有数の集落跡で、ここからは南関東や北関東などの土器のほか、これらの地域と本市域の特徴が融合した土器がみられることから、各地との活発な交流をうかがうことができる。

【古墳時代・豪族の台頭、水運流通のはじまり】

古墳時代になると遺跡の数が増加し、木田余台や常名台などに大規模な集落が形成されていることから、地域の人口は更に増加したと推測される。市内には、后塚古墳（前方後方墳）、王塚古墳（前方後円墳）、常名天神山古墳（前方後円墳）などの大型古墳が確認されており、土浦が霞ケ浦と桜川の結節点であったことから、被葬者は、霞ケ浦・桜川水運を掌握した豪族であったことがうかがわれる。

武者塚古墳石室

また、武者塚古墳（円墳）の出土品は法隆寺（奈良県）の仏像の文様装飾などと類似する要素をもつものであり、日本仏教文化の源流を探るうえで重要な資料となっている。

② 古代（奈良・平安時代）

【交通の要衝、荘園制度と京とのつながり】

７世紀後半、律令国家体制の整備の中で、国・郡・里が置かれ、地方行政機構が確立した。およそ本市域の南側が信太郡、東側が茨城郡、北側が筑波郡、西側の一部地域が河内郡であったと考えられている。この時代、奈良の都から続く一本の道（東海道）が牛久市、阿見町を通り、土浦市、かすみがうら市を抜け、国府のある石岡市に至っていた。

東城寺経塚群

また、桜川近くの台地上には曽祢駅の存在も想定されており、その付近には東海地方産の灰釉陶器が多く見つかった遺跡があり、交通の要衝だったことをうかがわせる。

水を介した他地域との交流は、様々な文物をこの地に伝えている。霞ケ浦に面した台地上に広がる田村・沖宿遺跡群では、高価な灰釉陶器短頸壺を骨蔵器に用いた平安時代前期の火葬墓や小規模な寺院の跡も二つ見つかっており、仏教信仰の広がりが見られる。

天の川の上流部の山中には、平安時代初期の創建と伝わる東城寺があり、天台系の寺院として中世への変革期を乗り越え、今日まで法灯（仏法、釈迦の教え）を伝えている。

平安時代の後半には武士が出現し、封建制度に基づく人々や私有地の支配が全国的に進んだ。本市域では北半に南野荘、南半に信太荘が常陸平氏によって成立し、京の貴族や社寺との結びつきを深めた。常陸平氏はこの時期常陸国南部の大半を支配し、多気致幹はその政治力と経済力を背景に東城寺に経塚群を築いた。

③ 中世（鎌倉・南北朝・室町時代）

【律宗文化、武士の台頭】

鎌倉時代に入って常陸平氏に代わり勢力を拡大したのが八田知家を祖とする小田氏で、常陸国南部を中心に鎌倉時代の常陸守護を務めた。

この地域の中世仏教の特色として、西大寺系律宗僧忍性が筑波山麓を布教の拠点としたことに伴い、鎌倉時代には律宗文化が広く伝えられ、般若寺・東城寺には律宗の結界石が伝わるほか、奈良の石工の影響を受けた花崗岩製の五輪塔などがある。この影響で筑波山周辺では花崗岩を利用した様々な石造物が多く制作された。

東城寺結界石

室町時代には臨済宗の隆盛に伴い、小田氏の庇護のもと復庵宗己が法雲寺を創建した。法雲寺には小田氏の肖像画や供養塔のほか、復庵の師中峰和尚の頂相（禅僧の肖像画）をはじめとする貴重な仏教遺物が今に伝えられている。

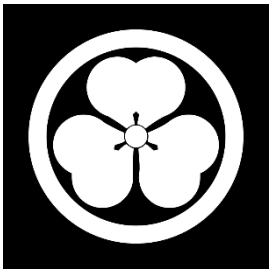
④ 近世（安土・桃山・江戸時代）

【土浦藩の成り立ち】

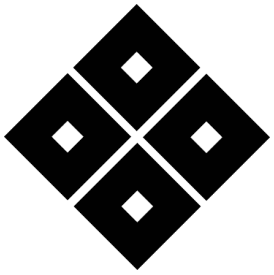
土浦は戦国時代、戦国大名である小田氏が領有していたが、小田氏が没落したのち、結城（ゆうき）氏の所領となった。慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後、徳川家康が大規模な領地替えを行った。それまで土浦を12年間にわたり支配していた結城秀康（ゆうきひでやす）が越前福井藩に移封（いほう）され、代わって譜代の松平信一（まつだいらのぶかず）が3万5000石で土浦に入った。これにより土浦藩が立藩し、徳川幕府下における土浦の新しい藩政時代が始まった。以降、土浦藩は譜代大名が代々の藩主となり、五氏十九代を数えた。

●土浦歴代藩主一覧

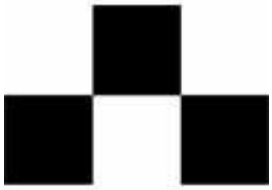
藩主		在職期間/在職年		幕府の役職	生年/死没年齢	石高
一代	松平信一（のぶかず）	天文8（1539）	～	寛永1（1624）	86	35,000
		慶長6（1601）	～	慶長9（1604）	3	
二代	松平信吉（のぶよし）	天正3（1575）	～	元和6（1620）	46	40,000
		慶長9（1604）	～	元和3（1617）	13	
三代	西尾忠永（ただなが）	天正12（1584）	～	元和6（1620）	37	20,000
		元和4（1618）	～	元和6（1620）	2	奏者番
四代	西尾忠照（ただてる）	慶長18（1613）	～	承応3（1654）	42	20,000
		元和6（1620）	～	慶安2（1649）	29	
五代	朽木稙綱（くつきたねつな）	慶長10（1605）	～	万治3（1660）	56	30,000
		慶安2（1649）	～	万治3（1660）	11	奏者番
六代	朽木稙昌（たねまさ）	寛永20（1643）	～	正徳4（1714）	72	27,000
		寛文1（1661）	～	寛文9（1669）	8	奏者番
七代	土屋数直（つちやかずなお）	慶長13（1608）	～	延宝7（1679）	72	45,000
		寛文9（1669）	～	延宝7（1679）	10	老中
八代	土屋政直（まさなお）	寛永18（1641）	～	享保7（1722）	82	45,000
		延宝7（1679）	～	天和2（1682）	3	奏者番
九代	松平信興（のぶおき）	寛永6（1629）	～	元禄4（1691）	63	22,000
		天和2（1682）	～	貞享4（1687）	5	奏者番
十代	土屋政直（まさなお）	寛永18（1641）	～	享保7（1722）	82	95,000
		貞享4（1687）	～	享保4（1719）	32	老中
十一代	土屋陳直（のぶなお）	元禄8（1695）	～	享保19（1734）	40	95,000
		享保4（1719）	～	享保19（1734）	15	奏者番
十二代	土屋篤直（あつなお）	享保17（1732）	～	安永5（1776）	45	95,000
		享保19（1734）	～	安永5（1776）	42	寺社奉行
十三代	土屋寿直（ひさなお）	宝暦11（1761）	～	安永6（1777）	17	95,000
		安永5（1776）	～	安永6（1777）	1	
十四代	土屋泰直（やすなお）	明和5（1768）	～	寛政2（1790）	23	95,000
		安永6（1777）	～	寛政2（1790）	13	奏者番
十五代	土屋英直（ひでなお）	明和6（1769）	～	享和3（1803）	35	95,000
		寛政2（1790）	～	享和3（1803）	13	奏者番
十六代	土屋寛直（ひろなお）	寛政7（1795）	～	文化8（1811）	17	95,000
		享和3（1803）	～	文化8（1811）	8	
十七代	土屋彦直（よしなお）	寛政10（1798）	～	弘化4（1847）	50	95,000
		文化8（1811）	～	天保9（1838）	27	寺社奉行
十八代	土屋寅直（ともなお）	文政3（1820）	～	明治28（1895）	76	95,000
		天保9（1838）	～	慶応4（1868）	30	大坂城代
十九代	土屋挙直（しげなお）	嘉永5（1852）	～	明治25（1892）	41	95,000
		慶応4（1868）	～	明治2（1869）	1	



丸に酢漿草（かたばみ）　藤井松平家家紋



隅立て四つ目結　朽木（くつき）家家紋



三つ石畳　土屋家家紋

三つ扇　松平信興家紋

【土浦城の整備】

土浦城は別名「亀城」ともよばれるが、これは大水のときにも城の部分が水につかることなく、その姿がまるで水に浮かぶ亀のようだったためであるとされている。城の別名が言い表しているように、霞ケ浦と桜川によってできた低湿地の中の微高地を巧みに利用して造られていた。築城は、室町時代の永享年間（1429-1441）に常陸守護であった八田知家の子孫で、豪族の小田氏に属する若泉（今泉）三郎が築城したのが最初である。

土浦城櫓門

土浦は江戸に近いということもあり、代々譜代大名が藩主の座に就いており、歴代藩主によって城郭や城下町の整備が推進された。慶長６年（1601）に松平信一が土浦藩主になると、本格的な城下町整備が開始され、城下を通る水戸街道を中心に、藩士・町人が住まう町場が拡大された。元和４年（1618）に西尾忠永が藩主になると、土浦城の東櫓・西櫓などが建てられ、西尾家に代わり藩主となった朽木稙綱は、明暦２年（1656）に土浦城本丸の門を櫓門に改めた。寛文９年（1669）には土屋数直が藩主になると、町場の整備を行った。数直は真鍋村の善応寺にあった照井から城内に上水道を引いたとされ、城下で木製の水道管が複数出土していることからも、江戸時代には土浦に上水道が整備されていたことが裏付けられる。天和２年（1682）に数直の子政直と代わって土浦藩主となった松平信興は、家臣に山本菅助晴方を招き、土浦城の改修を指揮させた。晴方は、甲斐国（現山梨県域）で武田氏に仕え、優れた築城術（土木技術）により出世し「武田二十四将」として知られた山本勘助（菅助）（初代）の流れを汲む四代目にあたる人物である。晴方の尽力により、信興が城主であった貞享４年（1687）までのわずか５年で、南北の門にあった馬出が大規模改修されたほか、城内の土塁、濠などが整備され、土浦城の守りが固められた。

【土屋家による治世と多様な藩士たち】

貞享４年（1687）に松平信興が土浦藩を去ると、再び土屋政直が藩主となり、以降、土屋家が代々土浦藩主を務めている。この藩政下において、町場の整備が進展し、商人や問屋などは互いに同業者組合（仲間）を結成することで、自らの営業を安定的に行った。

短刀「筑州住行弘」（国宝）

また、土屋家とその家臣の家には、江戸時代の武家文化を象徴する道具などが集積され、特に、父数直に続き江戸幕府の老中を務めた政直が隠居をした際には、親族関係のあった大名のみならず、有力大名が刀を贈った。国宝短刀「筑州住行弘／観応元年八月日」はその一つである。また、数直・政直父子は遠州流茶道を嗜み、茶入「塩屋」をはじめとする、数多くの茶道具を収集した。のちに土屋家で収集した道具類は「土屋蔵帳」にまとめられている。土屋家では多くの家臣を抱えていたため、武術（砲術を含む）、絵画、儒学、地理学、医学、茶道、蹴鞠、作刀などに精通した多才な藩士が、藩主と藩政、そして文化を支えた。

【水運の発展、江戸とつながる城下町】

土浦発展の大きな契機となったのは、江戸時代初期の利根川の河川改修（利根川東遷）で、利根川の流路が変化したことで、土浦は霞ケ浦と利根川、江戸川を介して江戸と繋がり、霞ケ浦や桜川を介した舟運が盛んになった。

川口に停まる高瀬船

土浦藩主による藩政と水陸路の発展により、土浦の町場には船問屋が営まれはじめ、船や物の輸送を差配することで、城下には様々な物資や情報が行き交った。土浦から江戸への船には米や薪炭・木材・醤油などが積まれ、江戸では干鰯・塩・小間物・古着などが積まれて土浦へ戻ってきた。特に土浦の名産であった醤油は、江戸をはじめとする各地へ運ばれ、産地土浦の名が世に広まった。特産品の生産には藩も関与することがあり、現在の新治地区を中心に生産されていた藺草（灯心草）は、江戸時代後期になると藩による専売品となっていった。利根川東遷に始まる水上交通網の発展と、譜代大名による城下町の整備や藩政により、土浦は物資や情報、人々が行き交う、常陸国内でも有数の拠点となった。

土浦藩領内では国学者や考証学者が盛んに活動を行い、土浦城下の商人で国学に関心を持った色川三中や、土浦藩の農政担当を務めた長島尉信などが名を馳せた。城下町で寺子屋を営んだ沼尻墨僊の下には、霞ケ浦沿岸を中心に各地から門人が訪れた。墨僊は寺子屋で読み書きを教えるとともに、天文に関心を持ち、渾天儀や大輿地球儀（傘式地球儀）を創作したほか、星座の観測記録を作成した。

⑤ 近現代

【明治維新 県南行政の中心地へ】

明治４年(1871)の廃藩置県によって土浦藩は廃され、土浦県が設置された。その後、土浦県は新治（にいはり）県となり、新治県は明治８年（1875）に茨城県の一部となるが、この間、旧土浦城本丸は土浦県庁・新治県庁として利用され、明治11年（1878）以降は新治郡役所として使われた。また、旧土浦城外丸に裁判所が設けられるなど、土浦は引き続き茨城県南の行政の中心地であり続けた。

旧茨城県立土浦中学校本館

経済的な側面においても、土浦は県南の商都として発展した。霞ケ浦の水運による物資の流通拠点として東京方面とのつながりが維持され、明治20年代（1887～1896）には新たに蒸気船も就航して銚子や鹿島方面を結んだ。醤油醸造については、東京市場だけでなく、土浦周辺の市場向けの生産に移行しながら堅調に推移していった。

明治時代になると全国に小学校が設けられ、土浦では明治６年（1873）に土浦小学校が最初に開校した。当時の学校は地域の人々の寄付金や授業料に頼るものであったため、校舎を建てること自体が大変な時代であったが、土浦小学校では明治18年（1885）に付属幼稚園も開園させ、幼児教育から地域の教育をリードし続けた。茨城県で最初の幼稚園となった土浦幼稚園では、東京女子師範学校付属幼稚園（とうきょうじょししはんがっこうふぞくようちえん）を模範とし、最新の幼児教育法が取り入れられるなど、熱心に教育が行われた。親の多くは商業に携わっており、商人が中心となって地域の学びの場を整え、土浦の教育を支えた。明治40年代(1907～1911)には県立土浦中学校や土浦小学校が洋風建築の校舎に建て替えられ、地域を担う人材を育てる教育の拠点となった。このうち、土浦中学校の校舎の一部は国の重要文化財（旧茨城県立土浦中学校本館）として現存し、土浦の教育におけるシンボルとなっている。

【水害とのたたかい】

昭和 13 年（1938）土浦町大洪水

河川と霞ケ浦は土浦に水運による繁栄をもたらしたが、大雨が降ると洪水になり易い欠点もあった。そのため土浦では江戸時代から昭和時代初期にかけて桜川の堤防決壊や霞ケ浦の逆流などで、たびたび大きな水害にあっていた。土浦藩の農政学者長島尉信（ながしまやすのぶ）の『土浦洪水記』（天保14年（1843））によれば、天明6年（1786）の水害では、城下町へ渡る桜川の銭亀橋付近で堤が切れ、銭亀橋の半分や近くの家が流されたことなどが記されている。

明治時代に入ってからは明治29年（1896）、同43年（1910）に被害を被り、又、昭和13年（1938）の大水害などは現在も記憶にとどめている市民が多く、旧市内（旧土浦町）のほとんどが被災し、霞ケ浦の上昇した水位が平常にもどるまで１か月を要した。

土浦はこのような歴史があったことから、人々のたゆまぬ努力と勇気によって治水対策が講じられてきた。明治時代中期に、日本鉄道土浦線（常磐線）の建設計画が挙がった際、当初の計画ルートは現在の土浦第二高等学校付近が停車場と予定されていた。これを聞いた前国会議員 色川三郎兵衛（いろかわさぶろべえ）は、「土浦の水害を除くには、霞ケ浦沿岸に堤防を築くほか手段なし」という確信を持って、線路敷設（ふせつ）の計画変更運動を熱心に行い、線路を現在位置の湖岸堤防上に敷設させたとされる。また、併せて川口川閘門（かわぐちがわこうもん）の設置を提言し、霞ケ浦の逆流防止を図った。この治水により、霞ケ浦の逆流が起因となる水害は減少したとされる。

昭和36年（1961）には、長雨により桜川が決壊・氾濫し、大きな被害が出た。これが契機となり、桜川の大規模な護岸改修が行われ、今日に至るまで大きな水害は無くなった。

【現在の土浦への道標（みちしるべ）】

大正10年（1921）に阿見村（あみむら）（現阿見町（あみまち））に臨時海軍航空術講習部が設置され、翌11年に霞ケ浦海軍航空隊が独立したことで、土浦は海軍航空隊の玄関口としての性格を有していく。昭和４年(1929)には飛行船ツェッペリン伯号が世界一周の途中で霞ケ浦海軍航空隊の基地に飛来、同６年(1931)には太平洋を横断したリンドバーグ機が霞ケ浦海軍航空隊付近の霞ケ浦に着水するなどし、各地から航空隊には多くの人々が見学に訪れた。

市制施行記念絵葉書「空都水郷の土浦」

また、昭和時代初期の土浦は、遊覧都市として花開く。筑波鉄道は筑波山への登山客を運び、霞ケ浦に就航した水郷汽船は水郷遊覧を楽しむ人々に利用された。観光資源として新たに桜川堤の桜が見いだされ、東京方面からの観光客を呼び込むため、春の桜川堤の観桜（かんおう）と、秋の花火大会は二大イベントとなった。

この頃は町の景観整備も進められ、水辺の都市に相応しい近代的な町並みが形成されている。

ツェッペリン伯号の飛来と見物人

昭和12年（1937）に土浦町は中家村を編入して町域を広げると、翌13年(1938)には藤沢村のうち大字虫掛を、14年(1939)には東村を編入した。そして15年(1940)には真鍋町と対等合併をして、市制施行により土浦市が誕生した。

昭和14年（1939）に設置された霞ケ浦海軍航空隊予科練習部は、翌15年(1940)に独立して土浦海軍航空隊（通称「予科練」）となり、土浦は予科練生ゆかりの町となる。また、航空隊の玄関口として、土浦はしばしば「空都」と形容されるようになった。戦時中、航空隊の基地とその周辺は激しい空爆を受けたが、市街地は大きな被害を免れたことで、多くの文化財や歴史資料が今日まで残されている。

戦後、昭和23年（1948）に土浦市は朝日村荒川沖と都和村を合併、さらに同29年(1944)には上大津村を合併した。また、同30年(1955)には藤沢村・斗利出村（とりでむら）・山ノ荘村（やまのしょうむら）が合併して新治村となった。このとき誕生した新治村は、平成18年（2006）に土浦市と合併し、今日の土浦市が形成された。

令和２年（2020）には、市政施行80周年を迎え、第９次土浦市総合計画における将来像「夢のある、元気のある土浦」の実現に向けてまちづくりが進められている。

（２）関わりのある人物

本市の出身者（ゆかりの人物）には、歴史上、多大なる功績を残している人物が数多く存在する。本項では、これらの人物のうち、「第２章 維持及び向上すべき歴史的風致」で取り上げる建造物や活動に関わる人物、歴史的風致が広がる地区に縁がある人物を紹介する。

① 土屋（つちや）　数直（かずなお）（1608-1679）（土浦藩７代･土屋家初代藩主）

数直は領内整備を積極的に進め、寛文（かんぶん）年間～延宝（えんぽう）年間（1661～1680）には領内全域で検地を行い、池溝（ちこう）の創設、田畑の改良、延宝６年（1678）には土浦城二ノ丸に米倉を建設した。また、数直は幕府の老中として江戸城に詰めている期間が長かったことから、寛文12年（1672）に嫡男（ちゃくなん）である政直に命じて領内巡視を行わせている。江戸時代以降の土浦藩では、松平家、西尾家、朽木家など前任の藩主から引き続いで城下町の整備が行われており、寛文９年（1669）には土浦城から見て南西方向の高台に鎮座する愛宕神社を裏鬼門鎮守として奉斎（ほうさい）し、社殿を造営した。翌、寛文10年（1670）北東の高台に位置する善応寺を鬼門鎮護として奉斎、観音堂を寄進し、境内から湧き出る照井（てるい）の井戸から土浦城まで上水道を整備した。

数直手製の茶杓「姫松」

② 土屋（つちや）　寅直（ともなお）（1820-1895）（土浦藩18代･土屋家10代藩主）

寅直の時代は幕末の激動期で人材育成が必要とされていた頃でもあった。寅直は、師として招聘（しょうへい）してきた藤森弘庵（こうあん）を起用し、天保10年（1839）藩校郁文館（いくぶんかん）を、城内から外西町（現土浦第一中学校）に再建し、藩士の子弟は８歳になるとこの藩校に入ることを義務づけた。規律ある教育により五十嵐愛山（あいざん）、中田平山（へいざん）等の俊才を続々輩出した。

土屋寅直

③ 藤森（ふじもり）　弘庵（こうあん）（1799-1862）

天保５年（1834）藩主土屋寅直が藩学改革を目指し、弘庵を招聘した。弘庵は郁文館の責任者となり藩士教育に専念したが、天保14年（1843）に郡奉行も兼務となり、朱子学の学説・実用学をもって農政・納税・司法に手腕を振るった。特に領内の荒地開墾や、イグサの栽培等を推奨し、産業の振興にも実績をあげた。

藤森弘庵

④ 沼尻（ぬまじり）　墨僊（ぼくせん）（1775-1856）

地理学者、教育者。天文地理に通じ、自作の渾天儀で天体を観測、長久保赤水（ながくぼせきすい）などの地図を模写するとともに、「大輿地球儀」、「渾天儀」、「エレキテル」を作製し、地理書「地球万国図説」を著した。また、中城町の自宅で寺子屋を開き、600人以上の塾生が集まったといわれる。

沼尻墨僊の墓
大手町　華蔵院内

⑤ 色川（いろかわ）　三中（みなか）（1801-1855）

土浦城下の商家に生まれ、薬種と醤油醸造の家業を経営するかたわら、国学者として常総地域史研究の基礎を築いた。その豊富な経済力で文献の収集保存に努め、学者や尊王の志士に活動資金を供給するなどして大きな功績を残した。

色川三中

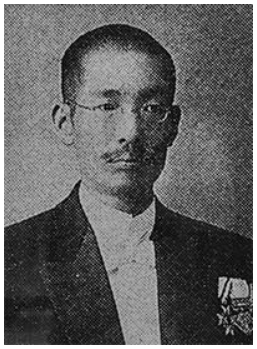
⑥ 柳沢（やなぎさわ）　柳旦（りゅうたん）（1864-1924）

医薬や書籍販売を生業とし、書籍の販売だけでなく、編著者として本の作成に携わった。明治34年（1901）には霞ケ浦沿岸を自ら実地踏査し、翌年「霞浦唱歌（かほしょうか）」を発行、その後、土浦町付近から筑波地方までを調査し、同 35 年には「筑波山と霞ケ浦」を刊行した。郷土歴史の研究に非常に熱心で、学童のための選書会を作った。

柳沢柳旦の句碑
中央一丁目　中城天満宮地内

⑦ 駒杵（こまきね）　勤治（きんじ）（1877-1919）

山形県新庄市（旧新庄町）に生まれる。東京帝国大学（現東京大学）を卒業後、茨城県庁に迎えられ数々の建築物の設計にあたった。なかでも、旧茨城県立土浦中学校本館と旧茨城県立太田中学校講堂は、国の重要文化財に指定されている。明治38年（1905）に退職後は、内務省に入って伊勢神宮式年遷宮に関わったほか、海軍省では佐世保鎮守府（ちんじゅふ）庁舎を設計した。やがて福岡県で建築設計事務所を開設するが、肺結核のため42歳の若さで世を去った。



駒杵勤治

⑧ 色川（いろかわ）　三郎兵衛（さぶろべえ）（1842-1905）

⑤色川三中の孫娘の婿で、名は英俊（ひでとし）（えいしゅん）。明治23年（1890）第１回衆議院議員選挙に当選し、国会議員として２期務めた。線路の盛土を霞ケ浦の堤防として築かせるとともに、霞ケ浦からの逆流を防止する川口川閘門（こうもん）の整備に出資するなど、土浦が悩まされてきた洪水問題の解消に尽力した。

色川三郎兵衛

⑨ 一色（いっしき）　範疇（はんちゅう）（1829-1901）

範疇は元治（げんじ）元年（1864）、水戸藩内外の尊王攘夷派が筑波山で挙兵した天狗党（てんぐとう）の乱に際し、土浦藩士として平定に当たった。明治11年（1878）には県内初の国立銀行「第五十国立銀行」を設立、頭取に就任した。五十銀行は昭和10年（1935）、水戸市に拠点を置く常磐銀行と合併して現在の常陽銀行になった。本市の産業振興に大きく貢献した人物の一人である。

一色範疇

⑩ 折本（おりもと）　良平（りょうへい）（1835-1912）

佐賀村（現かすみがうら市）の漁師。当時主流だった地引網での漁法に限界を感じ、明治13年（1880）に風力を利用し、船を横に滑らせて網を曳く、帆曳船を利用した帆引網漁法を考案し、漁師の労力軽減と漁獲の増加に貢献した。

帆曳船

⑪ 秋元（あきもと）　梅峯（ばいほう）（1882-1934）

秋元梅峯

曹洞宗、宝珠院神龍寺（ほうじゅいんじんりゅうじ）、第24世和尚。大正12年（1923）９月、関東大震災が起きた時、梅峯は大日本仏教護国団の団員を率いて震災で被災した住民の救済に奔走した。神龍寺に１日数百人の避難民を宿泊させ、境内に天幕を張り、炊き出しと施療を行った。また、阿見町に設置された霞ケ浦海軍航空隊で犠牲になった若者のため「国家の犠牲者たる英霊を弔うためと、団員死亡者の追善供養、これに兼ねて震災に倒れた哀れな魂の冥福、それには大衆が集まる花火興行より善き供養はない」と唱え、土浦花火大会を開催した。

⑫ 高田（たかだ）　保（たもつ）（1895-1952）

高田保

高田保は、明治28年（1895）現在の中央一丁目に生まれた。旧茨城県立土浦中学校を経て、早稲田大学を卒業後、劇作家・演出家として活躍するとともに、小説・評論・随筆にも健筆（けんぴつ）をふるった。中でも昭和23年（1948）から東京日日新聞（とうきょうにちにちしんぶん）に連載した随筆「ブラリひょうたん」は、人々の共感をよび、保の代表作となった。昭和27年（1952）57歳で没した。墓は市内の高翁寺（こうおうじ）にあり、市の史跡に指定されている。

４　文化財等の分布状況

本市には令和５年度（2023）現在、国宝の土浦藩土屋家刀剣「筑州住行弘（ちくしゅうのじゅうゆきひろ）」をはじめ、国指定の重要文化財が12件、茨城県指定文化財が46件、土浦市指定文化財が223件、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（以下、国の記録選択）が２件、国の登録有形文化財が18件、重要美術品が７件、埋蔵文化財包蔵地が637ヶ所あり、市指定文化財の数では茨城県内市町村の中で最も多い。

なお、本市の文化財308点のうち91点は、土浦市立博物館、上高津貝塚ふるさと歴史の広場の所蔵資料、寄託資料及び市が管理する史跡、建造物等である。

指定等文化財等の一覧表

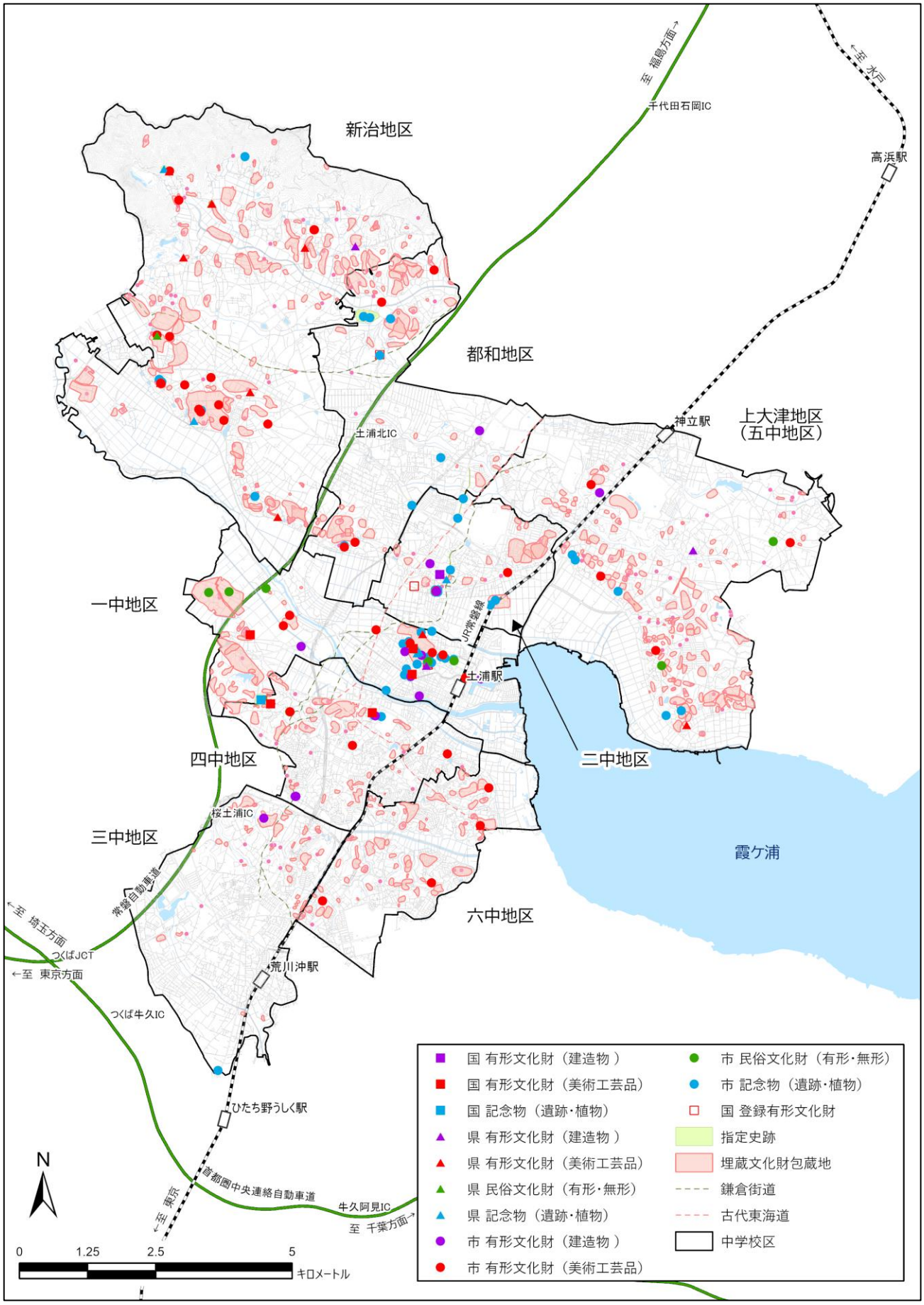
（単位：件、ただし埋蔵文化財は637ヶ所）令和5年3月末現在

類型		指定文化財			国の選択記録	国の登録文化財	国認定重要美術品	類型別計	備考
		国	茨城県	土浦市					
有形文化財	建造物	1	3	15		18	0	37	
	絵画	1	4	11		0	1	17	
	彫刻	1	9	42		0	0	52	
	工芸品	7	14	55		0	6	82	うち国宝1
	書跡	0	3	5		0	0	8	
	古文書	0	0	7		0	0	7	
	考古資料	1	4	15		0	0	20	
	歴史資料	0	1	12		0	0	13	
無形文化財		0	0	0	0	0	0	0	
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	0	7		0		7	
	無形の民俗文化財	0	3	6	2	0		11	※
記念物	遺跡	1	3	41		0		45	
	名勝地	0	0	2		0		2	
	動物、植物、地質鉱物	0	2	5		0		7	
文化的景観		0	0	0				0	
伝統的建造物群		0	0	0				0	
指定数計		12	46	223	2	18	7	308	

※「霞ケ浦の帆引網漁の技術」はかすみがうら市・行方市と共同

※「からかさ万灯」は国の記録選択・県指定無形民俗文化財に重複

文化財等分布図


新治地区
都和地区
上大津地区
（五中地区）
一中地区
二中地区
三中地区
四中地区
六中地区
霞ケ浦
至 福島方面
千代田石岡IC
至 水戸
高浜駅
神立駅
土浦北IC
JR常磐線
土浦駅
桜土浦IC
常磐自動車道
至 埼玉方面
つくばJCT
至 東京方面
つくば牛久IC
荒川沖駅
ひたち野うしく駅
首都圏中央連絡自動車道
牛久阿見IC
至 千葉方面
至 東京
N
0
1.25
2.5
5
キロメートル
国 有形文化財（建造物）
国 有形文化財（美術工芸品）
国 記念物（遺跡・植物）
県 有形文化財（建造物）
県 有形文化財（美術工芸品）
県 民俗文化財（有形・無形）
県 記念物（遺跡・植物）
市 有形文化財（建造物）
市 有形文化財（美術工芸品）
市 民俗文化財（有形・無形）
市 記念物（遺跡・植物）
国 登録有形文化財
指定史跡
埋蔵文化財包蔵地
鎌倉街道
古代東海道
中学校区

（１）国指定の文化財（一部）

① 短刀　銘　筑州住行弘（国宝（工芸品））

短刀「筑州住行弘」

南北朝時代、筑州住行弘の作。この短刀は地刃が冴え冴えとし、刃文が乱れ調子で帽子の返りが深い斬新なデザインの作品である。在来の鄙びた九州鍛冶の作風には見られない作柄であることから資料的価値が高く、保存状態の良さと美術工芸品としての出来の優位性から国宝に指定されている。第８代・９代土浦藩主土屋政直の正室幾宇子の父、松平若狭守康信から政直に贈られた。

② 旧茨城県立土浦中学校本館（重要文化財（建造物））

旧茨城県立
土浦中学校本館

明治37年（1904）７月に上棟、同12月に竣工した。ゴシック様式を基本とした意匠で、平面構成は左右対称の凹字型をなす。平成30年（2018）の耐震補強工事の際に屋根が一部復元された（天然スレート（粘板岩・玄昌石）葺）。壁はドイツ風下見板張りである。駒杵勤治の設計で、旧制中学校では、旧茨城県立太田中学校講堂とともに、国の重要文化財に最初に指定された。

③ 木造薬師如来坐像（重要文化財（彫刻））

木造薬師如来坐像

平安後期の作で真言宗常福寺の本尊である。薬師如来は薬師瑠璃光如来・大医王仏ともいわれ、東方浄瑠璃世界の教主で、病や苦悩を救う仏として信仰される。この薬師如来像は、カヤの寄木造、漆箔であるが、箔は剥落している。量感を感じさせる円満温雅な作風で、地方で制作された定朝様式の仏像として注目される。

④ 等覺寺銅鐘（重要文化財（工芸品））

等覺寺の銅鐘

建永年間（1206-1207）に小田氏の祖八田知家が三村山清冷院極楽寺の鐘として、作らせたものである。後に藤沢に移され、戦国末期藤沢城落城後、土浦城内に移された。江戸時代には城内本丸に置かれたが、明治17年（1884）極楽寺の後身とされる等覺寺へ移された。県内の古鐘中最古の銘文をもち、常陸三古鐘の一つとされる。鎌倉時代の鐘として端正な姿の名品である。

⑤ 般若寺銅鐘（重要文化財（工芸品））

鎌倉時代の建治元年（1275）に源海上人が大勧進（寄付を募り事業を進める中心役）となり、鎌倉の大仏を鋳造した丹治久友によって作られた。この鐘は鎌倉時代の典型的な形を示す名品で、常陸三古鐘の一つである。

般若寺の銅鐘

⑥ 茨城県武者塚古墳出土品（重要文化財（考古資料））

武者塚古墳は土浦市北西部の上坂田の台地上で発見された古墳である。古墳からは箱形石棺と横穴式石室の特徴を併せて持つ特異な石室が発見され、中からは古墳時代人の結った髪型「みずら」をはじめ、銀製の飾大刀や飾り金具、青銅製杓など全国的にも類例の少ない貴重な出土品が未盗掘状態で発見された。本古墳は古墳時代終末期（７世紀）に造られたものと考えられており、霞ケ浦沿岸地域の古墳時代を考えるうえで非常に重要な古墳である。古墳石室は土浦市指定史跡となっている。

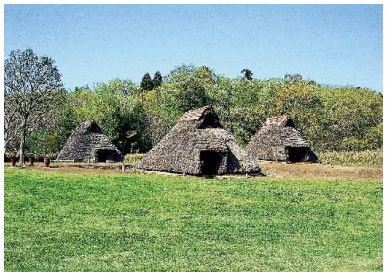
武者塚古墳展示施設覆屋

銀製帯状金具

⑦ 上高津貝塚（史跡）

総面積約44,000㎡、縄文中期から晩期にかけての貝塚で、縄文時代の住居跡４軒と、掘立柱建物跡等が発掘されている。

平成７年（1995）10月より「上高津貝塚ふるさと歴史の広場」として公開されている。



上高津貝塚

（２）県指定の文化財（一部）

① 前野家住宅（有形文化財（建造物））

建築年代は文化３年（1806）。「家普請付留覚帳」が残り、住宅の建築年代が明らかであることが大変貴重である。前野家は、代々名主を務めた旧家で、主家のほかに長屋門・土蔵・納屋等の付属棟も今に残る。明治期に修理を加え、一部柱の切除をはじめ間取りも変更されているが、主体構造は保たれている。

前野家住宅

② 冨岡家住宅（有形文化財（建造物））

創建は江戸時代中期頃と思われる。寄棟造、茅葺の大きな建物である。元は田の字形の間取りであったが、後世の増改築により平面規模が大きく複雑になり、屋根も大きくなった。小屋組や間取りなどに増改築の跡が残り、江戸時代後期以降に建物規模が大きくなった様子が分かる貴重な建物である。

冨岡家住宅

③ 矢口家住宅（有形文化財（建造物））

創建は江戸時代末期。水戸街道に面した土蔵造で、店蔵・袖蔵・元蔵の３棟が指定されている。土浦では天保12年（1841）９月12日の大火後、土蔵造や瓦葺屋根の町家が建てられるようになった。矢口家住宅はその代表的な建物である。

矢口家住宅

④ 般若寺石造五輪塔（有形文化財（工芸品））

製作は鎌倉時代末期と推定され、宍塚の般若寺境内にある。花崗岩製で、基壇には反花が配され、その下に格狭間があり蓮華模様が彫られている。全体として均斉のとれた美しい五輪塔である。

般若寺石造五輪塔

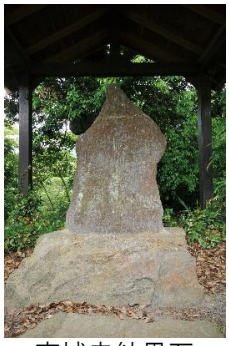
⑤ 日枝神社石造灯籠（有形文化財（工芸品））

「永正八天（1511）辛未十二月二十日」の紀年銘を有し、年代の基準となる石造灯籠で、日枝神社境内にある。花崗岩製、基礎は円形で、複弁の反花が彫られる。竿には、上下と中央に三帯の節があり、中台は六角形で下部に単弁の請花があり、各面には格狭間が彫られている。頂上の宝珠部は葱花状を呈する。

日枝神社石造灯籠

⑥ 東城寺結界石（有形文化財（考古資料））

この結界石は雲母片岩製で、碑面中央に大きく「大界外相」、右側に「建長五年癸丑」（1253）、左側に「九月二十九日」と紀年銘を有する。筑波山麓の東城寺集落内には他に４基一連の結界石が存在する。


東城寺結界石

⑦ からかさ万灯（無形民俗文化財）

からかさ万灯は、五穀豊穣・家内安全と雨乞いの祈願をこめて、江戸時代中期頃から行われてきたと伝わる花火行事である。現在、毎年８月15日に開催されている。昭和37年（1962）に県指定無形民俗文化財となっており、昭和57年（1982）に国の記録作成等を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。

からかさ万灯

⑧ 田宮ばやし（無形民俗文化財）

田宮ばやしは、田宮梶ノ宮神社へ奉納されるお囃子である。

楽器は大太鼓、小太鼓、大鼓、小鼓、横笛などを使う。演目は三切り、大杉ばやし、かっころばやし、八車、かどつけ、かえり、疱瘡ばやしの七種である。鉦を用いないことが演奏上の特徴である。また疱瘡ばやしの音律は、近在に例がない田宮ばやし独特のものである。

田宮ばやし

⑨ 日枝神社流鏑馬祭（無形民俗文化財）

日枝神社流鏑馬祭

社伝では弘仁元年（810）より始まったと伝わる。この流鏑馬は、村人に害をなした大猿を領主の小神野越前守（従羅天）と弓の達人の市川将監が退治した伝説を儀式化したものである。中世の伝承を基にした物語性をもつ流鏑馬として、全国的に珍しい。

⑩ 土浦城跡及び櫓門（史跡）

土浦城櫓門

土浦城は三ノ丸まで輪郭式の平城・水城で、別名亀城と呼ばれる。天守はなく、平成時代に西櫓、東櫓、土塁上の塀の一部が復元された。櫓門は入母屋・本瓦葺で、本丸にある江戸時代の櫓門では関東地方唯一の遺構である。

⑪ 東城寺経塚群（史跡）

東城寺経塚群

平安末期の豪族常陸平氏多気致幹が檀越（檀家）となり築いた。経塚とは、経典を土中に埋納したところで、当経塚は径４ｍの塚など12基が点在し、各々雲母片岩で石槨を造る。関東地方の代表的な経塚遺跡である。

⑫ 真鍋のサクラ（天然記念物）

真鍋のサクラ

明治40年（1907）真鍋小学校を現在地に移築したとき、校庭の南端に記念植樹されたものである。その後の校庭拡張により、現在では校庭の中央に５株が残存する。一時樹勢が衰えかけたが、大規模な回復処置により、花期に華麗な姿を再び見せている。樹種はバラ科サクラ属のソメイヨシノである。

⑬ 亀城のシイ（天然記念物）

亀城のシイ

土浦城二ノ丸跡南側土塁上に生育している。県下でも有数の大樹の一つである。樹幹は地上約１ｍの所で２本に分かれ、樹勢は旺盛であるが、幹の中心部は空洞である。樹種はブナ科のイタジイ（スダジイ）である。

（３）市指定の文化財（一部）

① 郁文館の正門（有形文化財（建造物））

郁文館の正門

土浦藩校の正門。江戸時代後期、藩政改革の一環として人材登用を目的に、藩校の創設・拡充が全国各藩で行われた。土浦藩では寛政11年（1799）　藩主土屋英直が二ノ丸に藩校を創設し、郁文館と命名した。天保10年（1839）寅直の時、現在地に文館・武館を新築移転した。この門はそのときのものである。廃藩後は、英学校化成館、師範学校、旧制中学校、高等小学校と変遷したが、昭和10年（1935）門だけを残して解体された。跡地は土浦第一中学校の敷地になっている。

② 善応寺観音堂（有形文化財（建造物））

善応寺観音堂

創建は寛文10年（1670）。土屋数直入藩後に、土浦城の鬼門を守護するために建てたと伝えられる。この建物は文化11年（1814）再建のものである。真言宗善応寺境内にあり、建物は木造平屋建、入母屋、桟瓦葺（当初は土葺）高欄付の浜縁が回る。漆喰鏝絵の妻飾りと鶴亀をあしらった懸魚などがある。

③ 土浦城旧前川口門（有形文化財（建造物））

土浦城旧前川口門

江戸時代後期の建築とみられる。形式は鏡柱の背後に控柱を設け、その上に屋根を掛けた高麗門で、武家屋敷のある多計郭と町人地を仕切る「前川口門」であったといわれている。明治18年（1885）土浦戸長役場（のち町役場）の表門となり、大正９年（1920）には田宿町（現大手町）の浄土真宗等覺寺山門として移築された。現在は亀城公園（土浦城址）内に移築されている。

④ 水天宮本殿（有形文化財（建造物））

水天宮本殿

総檜一間社流造。浜縁には高欄と脇障子が付く。建物全体を飾る彫刻は入念なものであり、小規模ではあるが、秀逸な社殿である。明治時代初期の建築とみられる。本殿前の一対の彫刻は天灯鬼である。天保11年（1840）久留米藩主有馬頼徳の三女竹姫が土屋寅直に嫁入りの際、国元の水天宮を江戸土屋邸に分祀した。昭和33年（1958）現在地に遷宮した。

⑤ 等覺寺鐘楼（有形文化財（建造物））

浄土真宗等覺寺境内にあり、慶応元年（1865）の建築。石積みの基壇上に四方転の丸柱を建て、腰貫・虹梁・頭貫・台輪で軒までの軸組を構成する。屋根は入母屋造桟瓦葺で、西側平には軒唐破風が付いている。元の屋根は柿葺きだったが、明治18年（1885）の火災で焼損し、明治30年（1897）に瓦葺に変更されている。平成８年（1996）に屋根を除き、当初の姿に復原した。銅鐘は国の重要文化財（工芸品）である。

等覺寺鐘楼

⑥ 東光寺瑠璃光殿（有形文化財（建造物））

曹洞宗東光寺にあり、薬師瑠璃光如来を安置する堂宇で、元文４年（1739）の建築。土間床に設置された厨子には、薬師瑠璃光如来をおさめる。天井は周囲に格天井、中央に鏡天井を打上げ、龍図を描く。

東光寺瑠璃光殿

⑦ 大聖寺山門・四脚門（有形文化財（建造物））

真言宗大聖寺の山門で、寺伝によれば、貞享２年（1685）に土浦城主松平信興から木材の寄進を受けて建てられた。型式は薬医門で、棟木が鏡柱と控柱の柱間の芯ではなく、前方に位置するのが特徴である。四脚門は、２本の円柱の親柱の前後に各２本の方柱の控柱を立てたもので、四足門ともいう。数少ない茅葺の寺門であり、均衡の取れた姿は秀逸である。明暦４年（1658）の墨書が検出されているが、後入れと見られ、他の材料等の状態から江戸時代初期以前の古調を保っている。

大聖寺山門

大聖寺四脚門

⑧ 八坂神社本殿・拝殿・幣殿（有形文化財（建造物））

棟札から元禄13年（1700）の建築、外壁や腰壁の彫刻から享和元年（1801）頃の再建が確認されている。江戸時代には土浦城の鎮守、明治時代以後は土浦の総鎮守として奉斎されてきた。本殿・拝殿・幣殿から成る。毎年７月に土浦市を代表する八坂神社例大祭及び祇園祭が盛大に行われる。

八坂神社拝殿

⑨ 醤油仲間証文帳（有形文化財（古文書））

宝暦11年（1761）醤油出荷の不正防止を目的に、９名で仲間（同業組合）を結成、以来明治８年（1875）までの100年余の記録である。記録は明和２年（1765）に始まり、出資金や折々の決定事項、醤油や原材料費等が記載されていた。構成員は主に12～14名で、構成員には出入りがあった。

醤油仲間証文帳

⑩ 土浦道中絵図（有形文化財（歴史資料））

土浦藩土屋家第四代藩主篤直が、宝暦８年（1758）９月に水戸街道の千住から土浦領中貫宿までを描いた道中絵図で、折本仕立てとなっている。絵図には、当時の水戸街道の道筋や千住大橋、中川・江戸川・利根川の舟渡し、金町松戸の関所・宿駅、小金原の狩場、集落、神社仏閣、田畑、松並木、原などが詳細に描かれ、それに土浦領の南北に建てられた領界石も描かれるなど、当時の水戸街道の様子をうかがうことができる。

土浦道中絵図

⑪ 大輿地球儀（有形文化財（歴史資料））

江戸時代の安政２年（1855）沼尻墨僊が考案し、職人に量産させたもので、100個以上が頒布された。輿地とは、輿のように万物を乗せる地の意味で、大地、全世界のことである。大きく球形をしている模型であることから、大輿地球儀という。傘のように膨らませるので「傘式地球儀」ともいう。傘式あるいは印刷による地球儀として日本最古である。

大輿地球儀

⑫ 旧川口川閘門鉄扉及び排水ポンプ （有形文化財（歴史資料））

川口川閘門は、霞ケ浦の増水・逆水から土浦の市街を守るため明治39年（1906）に色川三郎兵衛英俊らの働きかけにより設置された。排水ポンプは、閘門の閉門時に川口川の水を閘門の外（霞ケ浦）へ排水するため、昭和16年（1941）に設置された。

これらは、常磐線線路下を流れていた川口川の道路化・暗渠化によって役割を終えた。現在は水害と人々の戦いの歴史を伝える貴重な資料として市営駅東駐車場北側に展示されている。

旧川口川閘門鉄扉及び排水ポンプ

⑬ 土浦町内祇園祭礼式真図（有形の民俗文化財）

祇園の巡行を描く絵巻物で、美濃紙で裏打ちがしてある。寛政期の祭礼を描いたものとみられる。横町衆から始まり、中城・裏町・田中・本町と続き、中町衆で終わる。但し、田町・田宿・大町が欠落しているとともに、修復時に順序を間違えたと推測される。本来は本町・中町・(田町)・横町・川口・中城・(田宿)・裏町・田中・(大町)の順である。

土浦町内祇園祭礼式真図

⑭ 上高津大杉ばやし（無形の民俗文化財）

上高津町の大杉神社に奉納される悪疫退散、雨乞いの囃子。太鼓や笛のみで、「さんぎり」、「矢車」、「吹込み」、「大杉（疱瘡）ばやし」の４曲から成る。10月20日の鎮守の祭（大杉マチ）、正月23日の地蔵さま、８月24日の地蔵の縁日などにも演奏される。

上高津大杉ばやし

⑮ 菅谷ばやし（無形の民俗文化財）

菅谷町の八坂神社の祭礼や地蔵の縁日・雨乞いなどに奉納され、６曲から成る。祈願ばやしの「さんぎり」と「大杉ばやし」、神楽ばやしの「馬鹿ばやし」は音曲のみで、「仁羽（ひょっとこ）」、「四丁目（おかめ）」、「新馬鹿ばやし（狐）」は神楽踊りを伴う。

菅谷ばやし

⑯ 盆綱（ぼんつな）（無形の民俗文化財）

盆の13日夕刻、新仏を迎える子供の行事で、頬かぶりし、藁で作った龍の頭から尾までを皆で持ち、公民館を出発して墓場へ行く。そして墓場で先祖を乗せて各家まで送り届けながら歩く行事。現在、市内では佐野子（さのこ）だけに残る盆行事である。

盆綱

⑰ 的（まと）ぶち（無形の民俗文化財）

矢作地区の鹿島神社の祭礼で行なわれる弓神事で、農作の豊凶を占うものである。弓矢と的の棒はウツギを用い、的はウツギを円形に曲げて紙を張り、〇印に「大当り」、「当り」などと書く。この的を至近距離から弓矢で射る。現在は10月第３週目の日曜日に行なわれる。

的ぶち

⑱ 王塚古墳（史跡）

手野台地の南端、霞ケ浦を見下す位置に、前方部を北東に向けて築造されている前方後円墳である。市内では最大で、墳形は後円部の幅・高さに対して前方部が狭く低い典型的な柄鏡（えかがみ）形で、古墳時代前期の築造と考えられる。

王塚古墳

⑲ 后塚古墳（史跡）

手野台地の西端、霞ケ浦を望む台地先端に位置し、前方部を南西に向けて築造されている前方後方墳である。後方部と前方部の比高差は約４m、葺石や埴輪は見られない。前方後方墳が東日本の初期古墳に多く、前方後円墳に先行する古墳であると考えられるところから、この地方の初期の首長墳墓と推定される。

后塚古墳

⑳ 鉄砲塚（てっぽうづか）（史跡）

都和地区に位置する射撃訓練用の塚。高さ６m、底面の正面26m、奥行10m。文久３年（1863）、幕府の政策により江戸詰の藩士が帰藩し、常名に移住した際に、藩士の射撃訓練のために築いた塚である。

鉄炮塚

（４）記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（国の記録選択）

① 霞ケ浦の帆引網漁の技術

帆引網漁は、高さ９ｍ、幅16ｍもの巨大な帆を張った帆曳船を風の力で横に流しながら、袋状の網で漁を行う漁法である。平成30年（2018）に「霞ケ浦の帆引網漁の技術」※として、国の記録作成等を講ずべき無形の民俗文化財に選択された。

※ 土浦市では一般的に「帆曳」の名称を使用するが、国に文化財として選択された漁法は「帆引」を用いる。

帆曳船

② 大畑のからかさ万灯

県指定無形民俗文化財である「からかさ万灯」は、国の記録作成等を講ずべき無形の民俗文化財にもなっている。　※ 県指定無形民俗文化財と、国の記録選択では名称が異なる。

（５）国の登録文化財（一部）

① 一色家住宅主屋（建造物）

一色家は、土浦藩主土屋家と縁戚関係にあり、家老格を勤めていた。明治期には４代目の一色範疇（はんちゅう）が茨城県内で最初の国立銀行となった「第五十国立銀行」を設立した。一色家住宅主屋は範疇が隠居として居住した建物である。茅葺寄棟（よせむね）建築で、敷地内には庭園があり、当時の武家住宅の面影を残している。

一色家住宅主屋

② 旧大徳呉服店（建造物）

土浦旧城下の町人地、旧水戸街道の角地に構える。店蔵北棟、店蔵南棟、袖蔵、元蔵、向蔵の５棟で、それぞれ土蔵造二階建、瓦葺で江戸時代末期から明治時代前期に建てられたものである。当時は呉服屋であったが、現在は市が所有者から寄贈を受け、観光案内所「まちかど蔵」として活用している。

旧大徳呉服店

③ 旧野村さとう店（建造物）

明治時代前期から中期に建てられた建造物で、店舗兼主屋の正面２階は簓子（ささらこ）下見板張で、軒は出桁（だしげた）造として陰影を付ける。重厚な構えで旧城下の景観を形づくる。敷地北奥には煉瓦蔵が建つ。当時は砂糖店であったが、現在は市が所有者から寄贈を受け、観光案内所「まちかど蔵」として活用している。

旧野村さとう店

（６）未指定文化財（一部）

① 土浦聖バルナバ教会（建造物）

昭和５年（1930）の建築。当時としては珍しい洋風建築で、土浦で最初の鉄筋コンクリート建築である。

土浦聖バルナバ教会

② 霞月楼（建造物）

明治22年（1889）年創業の料亭。建造物の竣工年は創業と同時期と考えられる。多くの著名人が来店し、霞ケ浦海軍航空隊が設置されてからは、航空隊副長山本五十六をはじめ、海軍士官がよく利用した。

霞月楼

③ 保立食堂（建造物）

明治２年（1869）の建築。戦時中は、霞ケ浦海軍航空隊飛行予科練習生（予科練生）の指定食堂の一つで、店の二階は予科練生と家族との面会にも利用された。現在はてんぷらの老舗として中城通りの歴史景観を形成する建造物の一つとなっている。

保立食堂

④ 吾妻庵（建造物）

明治６年（1873）創業のそば屋。予科練生の指定食堂であり、戦時中に使用された看板が現存している。中城通りの歴史景観を代表する建造物の一つとなっている。

吾妻庵

⑤ 紫山塾（本間家住宅）（建造物）

土浦城の鎮守とされる八坂神社の隣に位置する。本間憲一郎（1889～1959）が大正13年（1924）頃に住居であった八坂神社社務所の隣地に建築。昭和３年（1928）に私塾である紫山塾を開設。水戸学を教える塾で、多いときは40名程の塾生がいた。

紫山塾（本間家住宅）

（7）特産品・銘菓

① 特産品

【水産加工品】

明治時代に入り、霞ケ浦で帆引網漁が始まると、シラウオ、ワカサギの漁獲量が増加し、東京など大都市への輸送に供するため、日持ちする煮干し、焼きわかさぎ、佃煮などの水産加工が始まった。現在でも佃煮は土浦の特産として販売されている。

水産加工品

【レンコン及びレンコン加工品】

霞ケ浦沿岸の地域特性を活かしたレンコン栽培が盛んで、生産量は日本一である。東京などの大都市へ出荷しているほか、レンコンを粉末に加工し、「レンコン麺」や「レンコン味噌」などとしても販売している。

収穫されたレンコン

レンコン加工品

【醤油】

江戸時代の土浦は、麦や大豆など醤油醸造の原料が豊富であったことから、醤油生産が盛んに行われていた。霞ケ浦の水運を利用することで、江戸に運ばれ、江戸では醤油のことを「むらさき」と呼んでいたが、これは筑波山の「紫峰（しほう）」を指していたとの伝えがある。現在も柴沼醤油が「紫峰」、「お常陸（ひたち）」などの銘柄で販売している。

醤油

【そば】

新治地区は、茨城県のブランド品である「常陸秋そば」の生産が盛んな地域である。全国のそば品評会においても、３年連続で表彰を受けるなど、品質が良いことで知られる。

そば畑

【カレー】

昭和４年（1929）にドイツの大型飛行船ツェッペリン伯号が、世界一周の途中、土浦に飛来した際、飛行船の乗組員に土浦ならではの食材を使ったカレーを振る舞って歓迎したと言われている。これにちなんで、レンコンを使用したカレーを開発し、販売している。

土浦ツェッペリンカレー

② 銘菓

城下町にちなんだ饅頭やかりんとうなどのほか、近年では、特産品のレンコンを加工した菓子も作られている。

・レンコンサブレー
・九万五千石（かりんとう）
・亀城まんじゅう
・蓮の実甘納豆　など

レンコンサブレー

九万五千石
亀城まんじゅう
蓮の実甘納豆